

大崎町教育委員会発掘調査報告書（10）
県営畠地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財報告書

おおぞの はままき たでいけ
大園・浜牧・蓼池遺跡
いくま
飯隈遺跡群

2018年3月

鹿児島県大崎町教育委員会



飯隈遺跡群 地下式横穴墓出土鐵製品

序 文

この報告書は、大崎町教育委員会が県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

畑かん支線道路の整備に伴い、工事着手前に大崎町教育委員会で大園・浜牧・蓼池遺跡と飯隈遺跡群の2つの遺跡の発掘調査を実施しました。それぞれ発掘調査で古墳時代の住居跡と、地下式横穴墓群が発見されております。2つの遺跡は隣接しているので、古墳時代の集落と墓域の関係について知る手懸りを得たと思います。

調査にあたっては、各関係機関、団体の皆様に多大なご支援とご指導を賜りました。郷土の歴史を知る貴重な資料となりました。この報告書が南九州における地域史の様相を究明していく資料として、お役にたてば幸いです。

ここに調査担当者、指導者、作業協力者をはじめ、ご協力とご理解をいただいた地域住民の皆様に、心からの感謝を申し上げます。

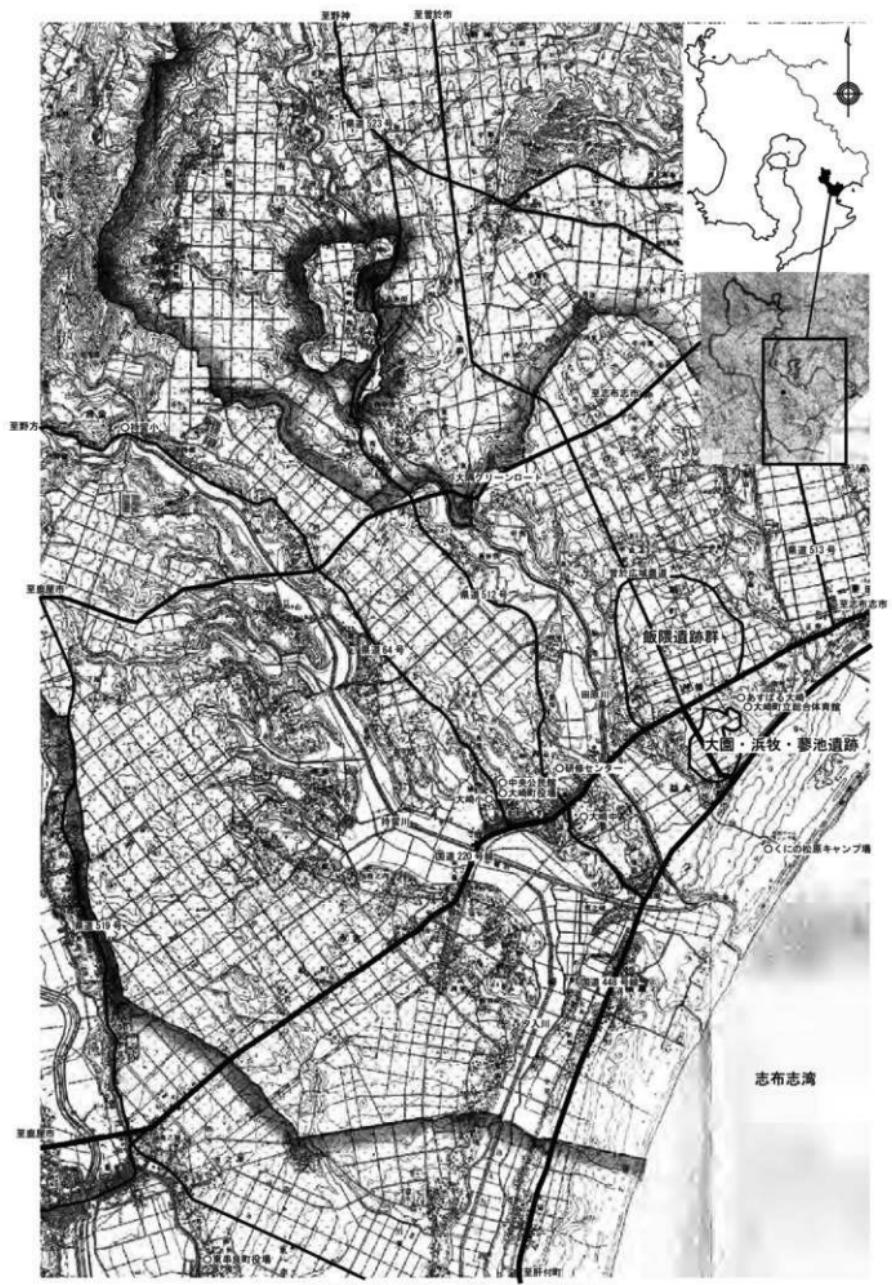
平成30年3月

大崎町教育委員会

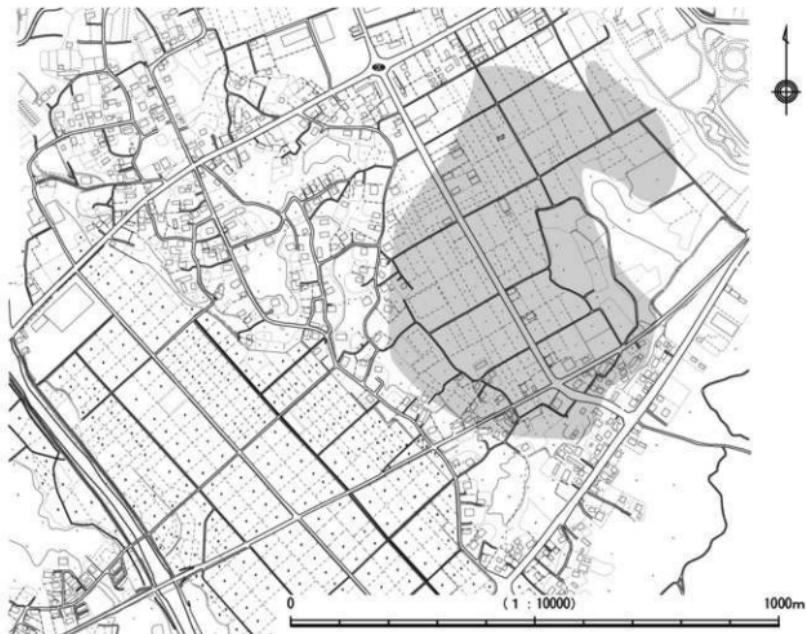
教育長 藤井光興

報 告 書 抄 錄

報告書抄録



飯隈遺跡群及び大園・浜牧・夢池遺跡位置図



調査対象地の位置図と周辺地形（上：飯隈遺跡群 下：大國・浜牧・蓼池遺跡）

例　　言

1. 本書は、県営畑地帯総合整備事業に伴う大園・浜牧・蓼池遺跡及び飯隈遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、鹿児島県曾於郡大崎町益丸、神領に所在する。
3. 発掘調査及び報告書作成は、鹿児島県曾於畑地かんがい農業推進センターから大崎町が委託を受け、大崎町教育委員会が担当した。
4. 大園・浜牧・蓼池遺跡の発掘調査は、平成 22 年（確認調査）、平成 24 年（本調査）に実施し、整理作業、報告書作成は平成 25～29 年度に実施した。飯隈遺跡群の発掘調査は、平成 22 年（確認調査）、平成 27 年（本調査）に実施し、整理作業・報告書作成は平成 28～29 年度に実施した。
5. 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
6. 挿図の縮尺は、各図面に示した。
7. 本書で用いたレベル数値及び座標は、工事計画図面に基づく海拔絶対高、世界公共座標を用いている。
8. 遺構実測における基準点の座標及び KBM の測量は朝日開発コンサルタント株式会社が行った。
9. 発掘調査における平面図面の作成・写真的撮影は内村・大野が行った。ただし、地下式横穴墓（2 基）の遺構実測は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。
10. 出土遺物のレベル測量から取り上げは内村・大野と整理作業員で行った。
11. 遺構のトレースは内村・大野と整理作業員が行い、遺物の実測・トレースは整理作業員で行った。実測図面の添削は鹿児島県立埋蔵文化財センター今村結記氏の支援を得た。
12. 出土遺物のうち、鉄製品については、鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也氏に、貝製品については、鹿児島市立ふるさと考古歴史館の中村友昭氏に指導と助言を得た。
13. 出土人骨については、鹿児島女子短期大学の竹中正巳氏に人骨の鑑定及び指導を得た。
14. 遺物の写真撮影は、（公財）鹿児島県文化振興財團鹿児島県立埋蔵文化財調査センターの吉岡康弘氏の指導を得た。
15. 鉄製品については、X 線による写真撮影及び保存処理は、鹿児島県立埋蔵文化財センター 武安雅之氏に委託した。
16. 本書の執筆は、下記のように分担し、編集は内村・大野が担当した。なお、執筆にあたって、参考文献等資料収集においては、鹿児島県立埋蔵文化財センター 今村結記氏の協力を得た。

第 1～4 章　（内村）

第 5 章　　（大野）

第 6 章　　（内村・大野）

17. 遺物は大崎町教育委員会で保管し、展示・活用する。なお、大園・浜牧・蓼池遺跡出土遺物の注記略号は「OHT」とし、飯隈遺跡群は「IK」としている。

本文目次

巻頭図版

序文

報告書抄録

飯隈遺跡群及び大園・浜牧・蓼池遺跡位置図

調査対象地の位置図と周辺地形

例言

目次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 発掘調査の経過と組織	1
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法	11
第1節 発掘調査の方法	11
第2節 整理・報告書作成作業の方法	11
第4章 大園・浜牧・蓼池遺跡の発掘調査の成果	13
第1節 層序	13
第2節 確認調査の概要	13
第3節 事業区周辺の分布調査	13
第4節 工事立会いの概要	13
第5節 本調査の概要	14
第5章 飯隈遺跡群の発掘調査の成果	23
第1節 層序	23
第2節 確認調査の概要	23
第3節 本調査の範囲の設定	27
第4節 遺構の概要	28
第6章 総括	40
第1節 大園・浜牧・蓼池遺跡発掘調査のまとめ	40
第2節 飯隈遺跡群発掘調査のまとめ	40

插図目次

第1図 大園・浜牧・蓼池遺跡の範囲と傾かん 29号支線道路整備範囲	3
第2図 飯隈遺跡群の範囲と傾かん 24号支線道路整備範囲	4
第3図 大崎町における地質図	8
第4図 飯隈遺跡・大園・浜牧・蓼池遺跡及び周辺遺跡位置図	9
第5図 大園・浜牧・蓼池遺跡におけるトレンチ配置図	15
第6図 大園・浜牧・蓼池遺跡工事立会い及び遺構配置図	16
第7図 壊穴住居跡実測図及び調査区東壁面上層断面図	17
第8図 壊穴住居跡出土遺物（土器）	19
第9図 壊穴住居跡出土遺物（石器）	20
第10図 包含層出土及び周辺採取遺物	21
第11図 工事の範囲とトレンチ配置図	24
第12図 地中レーダ探査の範囲と異常箇所及びトレンチ配置図	25
第13図 地中レーダ探査の範囲と異常箇所及びトレンチ配置図	26
第14図 飯隈遺跡群工事と本調査の範囲及び遺構配置図	27
第15図 1号地下式横穴墓実測図展開図	29
1号人骨及び遺物出土状況図	30
第17図 1号玄室天井部平面図	30
第18図 1号澳門断面見通し図	30
第19図 1号出土遺物	31
第20図 20号地下式横穴墓実測図展開図	32
第21図 20号壘断見通し断面図	33
第22図 20号天井部工具痕実測図	34
第23図 20号粉骨及び遺物出土状況図	34
第24図 20号遺物出土状況詳細図	34
第25図 20号出土遺物	34
第26図 20号出土遺物	34

第27図 23号地下式横穴墓実測図展開図	35
第28図 23号玄室横断見通し断面図	36
第29図 23号人骨及び遺物出土状況図	36
第30図 23号出土遺物1	37
第31図 23号出土遺物2	38

表 目 次

第1表 周辺遺跡地名表	10
第2表 大園・浜牧・蓼池遺跡出土土器観察表及び石器計測表	22
第3表 地中レーダ探査異常信号箇所結果表	23
第4表 飯隈遺跡群地下式横穴墓出土遺物計測表	39
第5表 地下式横穴墓調査結果表	40

図 版 目 次

図版 1	41
①壊穴住居跡検出状況	
②壊穴住居跡埋土堆積状況	
③床面検出状況及び遺物出土状況	
④東調査区壁面の埋土状況	
⑤西側壁面下の壁壘溝	
⑥完掘状況	
図版 2	42
壊穴住居跡出土遺物・包含層出土遺物	
壊穴住居跡出土遺物（高杯）	
壊穴住居跡出土遺物（高杯）	
壊穴住居跡出土遺物（台石）	
壊穴住居跡内出土遺物（鉢形土器）	
図版 3	43
①1号完掘状況	
②1号壊穴土層断面	
③1号人骨出土状況	
④20号完掘状況	
⑤20号玄室完掘状況	
⑥20号玄室右奥工具痕	
図版 4 23号地下式横穴墓	44
①23号壊穴土層断面	
②23号玄室左奥完掘状況	
③23号玄室右奥完掘状況	
④23号玄室右奥工具痕	
⑤23号人骨及び鉄製品出土状況左壁より	
⑥23号人骨及び鉄製品出土状況奥門より	
⑦23号頭骨・鉄刀・鉄鏃出土状況	
⑧23号頭骨接写	
図版 5	45
1号, 20号, 23号 地下式横穴墓出土鉄製品	
図版 6	46
1号, 20号, 23号 地下式横穴墓出土鉄製品X線写真	
図版 7	47
23号 地下式横穴墓出土鉄製品X線写真	
図版 8	48
①20号地下式横穴墓出土貝製品	
②23号地下式横穴墓出土頭骨	

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成11年に鹿児島県農政部は、県営畑地帯総合整備事業計画地における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化財課（以下、県文化財課）に照会があつた。

これを受けて、平成12年3月に県文化財課と鹿児島県立埋蔵文化財センターは当該地区的分布調査を実施した。飯隈遺跡群はすでに周知の遺跡であり、大園・浜牧・蓼池遺跡も、平成8年の農政分布調査で周知の埋蔵文化財包蔵地となっていた。いずれも事業計画地が当遺跡内にあることが確認されたため、事前の協議と調査を行うことになった。

平成16年度に同事業のパイプライン埋設に伴い、大隅耕地事務所（現大隅地域振興局農村整備課）の依頼を受け、大崎町教育委員会（以下、町教育委員会）は飯隈遺跡群と大園・浜牧・蓼池遺跡の試掘確認調査を実施したが、この段階では遺構、遺物は確認されなかつたため、工事を着工した。

平成21年に大隅地域振興局農村整備課及び、大崎町耕地課から煙かん支線道路の整備に伴う埋蔵文化財確認調査の要望があった。これを受けて町教育委員会は煙かん農道24号支線道路に伴う飯隈遺跡群の中レーダ探査及び試掘確認調査を平成22年11月及び平成23年3月に、煙かん農道29号支線道路に伴う大園・浜牧・蓼池遺跡の試掘確認調査を平成23年2月に実施した。確認調査の結果、いずれの遺跡も遺構、遺物が確認されたため、この結果を踏まえて県文化財課と町教育委員会と大隅地域振興局農村整備課及び、大崎町耕地課は、工事における取り扱いについて協議を行った。

飯隈遺跡群では、確認調査で地下式横穴墓の堅坑と判断できる遺構プランが1箇所確認された。地中レーダ探査の結果を含めても、遺構プランが確認されたのはこの1箇所だけであったが、未発見の地下式横穴墓が存在する可能性もあるため、確認されている地下式横穴墓の本調査だけでなく、地形的に地下式横穴墓が分布していると推定される範囲の調査も行うことになった。

大園・浜牧・蓼池遺跡については確認調査で1トレンチのみ遺物が確認されているため、本調査を行う範囲を定めにくく、遺構の存在も不明なため、遺物包含層が残存する範囲の工事立会いを実施することにした。遺構・遺物が確認され次第、協議を行うものとした。

飯隈遺跡群については平成27年度に本調査を実施し、大園・浜牧・蓼池遺跡については平成24年度の工事着工にあわせて、工事立会いを実施した。なお、工事立会いで、遺構プランが確認されたため、早急に本調査に着手した。

第2節 発掘調査の経過と組織

（平成22年度）

烟かん農道24号支線道路（飯隈遺跡群内）及び29号支線道路（大園・浜牧・蓼池遺跡内）の計画地内にそれぞれトレンチを設定し、試掘・確認調査を行った。

調査責任者	町教育委員会教育長	諸木 逸郎
調査事務	町教育委員会社会教育課長	大野 達夫
	"	課長補佐 入江田吉文
調査担当	町教育委員会社会教育課文化公民館係主任	内村 憲和
実測補助	町教育委員会社会教育課臨時職員	出原ふじ子・清水優子・上档さつき

（平成24年度）

烟かん農道29号支線道路の工事に伴い、大園・浜牧・蓼池遺跡の工事立会いを実施した。工事立会いで検出された遺構プランについては、埋土の掘り下げと記録保存を実施した。

調査責任者	町教育委員会教育長	藤井 光興
調査事務	町教育委員会社会教育課長	入江田吉文
	" 文化公民館係長	楠原 薫
調査担当	町教育委員会社会教育課主任	内村 憲和
発掘作業・実測補助	町教育委員会社会教育課臨時職員	出原ふじ子・清水優子・上档さつき

（平成27年度）

烟かん農道24号支線道路の工事着手に伴い、飯隈遺跡群の本調査を実施した。

調査責任者	町教育委員会教育長	藤井 光興
調査事務	町教育委員会社会教育課長	中村富士夫
	" 課長補佐	谷迫 利弘
調査担当	町教育委員会社会教育課係長	内村 憲和
	" 主任	大野 泰輔
実測補助	町教育委員会社会教育課臨時職員	出原ふじ子・清水優子・上档さつき
調査支援	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員 今村 結記
調査指導	鹿児島大学総合研究博物館 教授 橋本 達也	鹿児島女子短期大学 教授 竹中 正巳

(平成 28 ~ 29 年度)

報告書作成に向け、遺構、遺物の実測図及び位置図などのトレースを行った。また遺物の写真撮影を実施した。資料をまとめて執筆を行った。

3/12	火	壁帶溝実測図作成。遺構配置図作成。完掘状況写真撮影。
------	---	----------------------------

平成 27 年度

(飯隈遺跡群本調査)

調査責任者	町教育委員会教育長	藤井 光興
調査事務	町教育委員会社会教育課長	中村富士夫
	〃 課長補佐	谷追 利弘
調査担当	町教育委員会社会教育課係長	内村 憲和
	〃 主事	大野 泰輔
実測補助	町教育委員会社会教育課臨時職員	
	出原ふじ子・清水優子・上档さつき	
調査支援	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	
	今村 結記	
調査指導	鹿児島女子短期大学 教授	竹中 正巳

なお、飯隈遺跡群の発掘作業では、社会教育課職員である長谷川勝哉と較島新也にも協力を得た。また、大園・浜牧・蓼池遺跡の発掘作業では、楠原薰と米永康平にも協力を得た。

日誌抄

平成 22 年度

(飯隈遺跡群確認調査)

日付	曜日	作業内容
11/11	木～ ～12 金	畑かん農道 24 号支線道路計画地の地中レーダ探査実施。
11/15	月	計画地内の広域農道西側 (No.13 ~ EP) に 24 ~ 30T を設定。重機で掘り下げ。土層記録後埋め戻し。
2/21	月～ ～23 水	計画地内の広域農道東側に 1 ~ 23T を設定。重機で掘り下げ。記録後埋め戻し。

日付	曜日	作業内容
7/14 ～24 火～ 金		平成 22 年度の確認調査時に現状復旧をするため、竹林等の伐採作業を行う。簡易トイレを設置。
7/27 ～28 月～ 火		伐採作業終了後、1 号地下式横穴墓 (以下 1 号と称す) の堅坑検出を開始し、検出状況の写真撮影を行う。
7/29 ～ 8/ 4 水～ 火		1 号の堅坑を 4 分の 1 ずつ掘削し、土層断面実測や写真による記録作業を行い、完掘。
8/ 5 ～ 21 水～ 金		20 号地下式横穴墓 (以下 20 号と称す) の堅坑検出掘削及び記録作業 (土層断面実測・写真撮影) を開始し、完掘する。遺構実測の委託を行い、堅坑から実測を開始。
8/24 ～ 9/ 7 月～ 月		鹿児島女子短期大学竹中正巳氏より、1 号から出土した人骨の鑑定及び調査指導。 農道整備事業範囲内において、道路面の表土剥ぎを行い、遺構の有無を確認。
9/11 金		農道事業範囲内において、道路面に地下式横穴墓が発見されないか、地中レーダ探査実施。 鹿児島大学橋本達也氏の調査指導。
9/14 ～ 17 月～ 木		1 号及び 20 号の清掃作業を行い、完掘状況及び調査全景の写真撮影を実施する。
9/25 ～ 11/30 金～ 月		1 号、20 号の埋め戻し作業を実施する。
2/15 ～ 3/10 日～ 木		20 号より西側で、道路工事中に陥没する事案が発生し、地下式横穴墓が 1 基 (23 号) 発見される。そのため、速やかに発掘調査を行い、記録保存作業を実施する。なお、玄室から人骨が 1 体、鉄製品 (鉄刀・鉄劍・鐵鎌・刀子) が出土する。

(大園・浜牧・蓼池遺跡確認調査)

日付	曜日	作業内容
2/15 ～16 火～ 水		計画地内に 1 ~ 14T 設定・重機で掘り下げ。土層・遺物出土状況記録後埋め戻し。

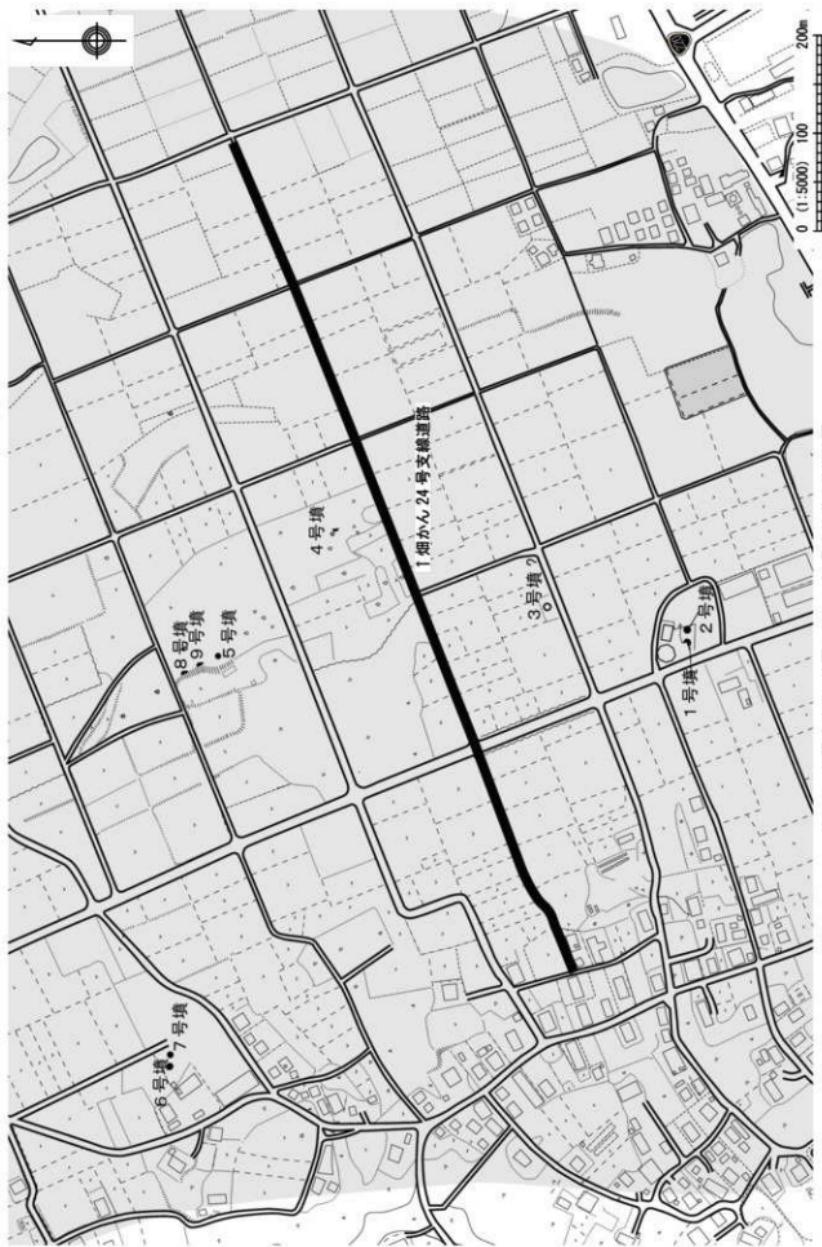
平成 24 年度

(大園・浜牧・蓼池遺跡工事立会い・本調査)

日付	曜日	作業内容
3/ 5	火	工事立会い。遺構プラン検出。遺構精査。検出状況写真撮影。
3/ 6	水	工事立会い。遺構プランの掘り下げ。
3/ 7	木	遺物出土状況及びセクションベルト写真撮影。
3/ 8	金	セクションベルト除去。床面及び遺物出土状況実測図作成。
3/ 9	土	調査区壁面土層断面図作成。
3/11	月	遺物レベル実測。取り上げ。貼床面掘り下げ。壁帶溝検出。掘り下げ。



第1図 大園・浜牧・夢池遺跡の範囲と烟かん 29号支線道路整備範囲



第2図 既設道路跡の範囲と煙かん 24 号 支線道路整備範囲

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大崎町は鹿児島の東部、大隅半島の南西部に位置し、総面積は100.82 km²、東西に約8 km、南北に約18 kmとなっている。東は志布志市、南は肝属郡東串良町、西は鹿屋市、北は曾於市と接し、南東は志布志湾に面している。

北部を大島川が西から東へ流れ、曾於市大隅町、志布志市有明町で南流しながら菱田川に合流して志布志湾に注いでいる。また、本町東部を田原川、中央部を持留川が南流し、これらも志布志湾に注いでいる。これらの河川によって本町の地勢は概ね2地区に分けられる。北端部は、菱田川の上流となる大島川を中心として、河川が溶結凝灰岩を切り開き、谷間の多い起伏の激しい渓谷を構成している。

本町の大部分はシラス土壌の上に形成された黒色火山灰土壌が広がる台地となっている。シラス台地の大部分は今から約29,000年前に姶良カルデラを起源とする破局噴火による入戸火砕流堆積物で構成されている。そのため本町は北部から南部の志布志湾に向けて緩やかな下り勾配となっている。しかし、本町においては北端の台地と中部以南の台地を分断するかのように丘陵地帯となっている。本町と志布志市有明町との境にある草野丘は代表的である。いずれの丘陵部も砂岩で構成されている。入戸火砕流の埋没を免れた山の頂部が丘陵地帯を形づくっている。

中部から南部地帯は北西から東南の海岸線に向かって、緩やかに傾斜している起伏の少ない平坦な地帯であり、場所によって志布志湾まで見通せる。志布志湾に注ぐ河川によって台地は区切られ、本町西部から永吉台地、仮宿台地、飯隈（中神）台地に分類される。永吉台地の西側を串良川、永吉台地と仮宿台地間に持留川、飯隈台地の東側を菱田川が流れている。入戸火砕流原を現在の河川の本流であった古肝属川、古菱田川により削削、開析されて現在の地形の基礎が出来上がった。なお、本町飯隈台地東部に位置する菱田・中神地区及び志布志市有明町蓬原地区までは一段低い菱田原台地が広がっており、菱田川によって形成された河成段丘が形成されていたことを示す。同じく菱田川対岸の志布志市有明町野井倉地区でも同じような河成段丘が見られる。

縄文海進最盛期の頃まで志布志湾に突出していたシラス台地の先端部が約5,500年～5,000年前の離水時まで海岸線に沿うように海の浸食を受けた。肝属郡東串良町～志布志市に至ってこの時に形成された海食崖を見ることができる。約5,700年～5,500年前には、串良川下流域に河川堆積による大塚砂州が形成され、砂州の背後は閉塞を受け、広大な湿地が現れ、後に泥炭層を形成することになる。約5,500年～4,500年前には横瀬砂州が形

成され、同じく砂州の後背に湿地が形成された。永吉台地と仮宿台地間の低湿地には広域に泥炭層が厚く堆積しており、現在も非常に脆弱な地盤となっている。

横瀬砂州成立後も断続的に志布志湾岸に砂州が形成されていった。さらにそれぞれの砂州形成時期後間もなく海浜からの飛砂による砂の再堆積があり、砂丘が形成されていった。約1,700年前以降、砂丘が急速に発達し、志布志湾岸には大規模な砂丘帯が形成された。最も発達しているところでは、本町益丸で標高約27 mの高さに及んでいる。

第2節 歴史的環境

大崎町における遺跡の分布は、主に田原川、持留川、菱田川、大島川を臨む台地の縁辺部に沿って分布している。現在も東九州自動車道建設に伴う発掘調査が行われており、次第に本町の歴史を知る上で重要な資料が得られつつある。

1. 旧石器時代

大崎町では旧石器時代の遺跡フレークの出土が確認されている二子塚A遺跡がある。また、報告書が未刊行のため、詳細は不明だが、東九州自動車道建設に伴う野方地区の天神役遺跡の発掘調査で旧石器時代の石器群が確認されている。

2. 縄文時代

過去に、野方地区山間部などで耕作地から出土した縄文時代後期の土器が採集されたものしか資料がなかったが、近年の発掘調査件数の増加に伴い、縄文時代の遺構・遺物が確認されるようになった。平成11年に県営中山間地域総合整備事業の農道整備に伴い発掘調査を行った立山B遺跡は、本町北部の山間部に立地する。遺構は確認されなかつたものの、晚期の黒川式を中心として縄文時代の遺物が出土した。

平成11年に県道里石線改良工事に伴う二子塚A遺跡の発掘調査では吉田式、石坂式、桑ノ丸式など早期の土器が出土し、集石遺構も確認された。

大隅グリーンロード建設に伴い発掘調査を行った下畠遺跡では前平式、石坂式、下剥峯式、手向山式、平格式などの早期の土器が出土するとともに、13基の集石遺構が発見された。また、遺構は確認されていないが指宿式を中心とする後期の土器も出土した。

下畠遺跡と同事業で発掘調査を行った綱田山段遺跡では後期土器としての丸尾式、北久根式、西平式、御領式が、晚期では黒川式が出土し、それに伴う柱穴群と土坑2基が確認された。これまで本町の発掘調査で報告されている。

東九州自動車道建設に伴う発掘調査では、野方地区に

所在する天神段遺跡で縄文時代前期の曾畠式の時期に相当する石劍が出土した。他、中期の深浦式土器、晩期の入佐式土器などの遺物に伴い遺構が確認されている。また野方地区では天神段遺跡の他に、加治木塙遺跡、椿山遺跡、野方前段遺跡でも落とし穴などが確認されている。

永吉天神段遺跡でも早期の下剥峯式土器や押型文土器、前期では曾畠式土器、後期の岩崎下層系土器などが報告されている。また晩期の黒川式土器や刻目突帯文土器に伴い、堅穴住居跡1基が確認された。

3. 弥生時代

平成11年に民間の砂丘に伴い調査を行った沢目遺跡は、本町南部志布志湾岸の「ぐにの松原」内に所在する。砂丘に埋没した集落遺跡である。出土遺物として入来I・II式から山ノ口I・II式の時期に相当する弥生時代中期のものと、中津野式の時期を中心とする弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土している。その他輕石製の加工品や、鉄製品も確認された。在地では見られない型式の土器も多く、山ノ口式と共に出土した須玖式や、布留式を模倣した古式土器や、東九州地域から瀬戸内地域の影響を受けた土器も出土しており、広域的な交流の痕跡を窺わせる。また、沢目遺跡は約5,000年前から4,000年前に形成された砂丘と古墳時代以降に形成された砂丘との間のクロスナ層を包含層としており、この2時期の砂丘の形成時期を示す手がかりとなつた。

先述した下堀遺跡でも中期の遺構・遺物が確認された。山ノ口II式を中心とする集落跡で、13基の住居跡のほか、大型住居跡が2基発見された。また、5基の土坑を伴う掘立柱建物跡が計画的な配列で出土している。

平成19年に調査を行った麦田下遺跡は、弥生時代後期初頭に位置付けられる在地系土器が発見された。高付式土器の初段階と考えられる。その他西南四国型土器がまとまって出土しており、西南四国との関連を裏付ける貴重な成果を得ている。また、下堀遺跡・麦田下遺跡の立地する仮宿台地の持留川を挟んだ対岸の永吉台地に立地する高久田A遺跡では、平成21年度の調査で弥生時代後期～終末期に相当する集落跡が確認された。

永吉天神段遺跡では入来II式、山ノ口I・II式が出土している。

本町北部では立山B遺跡で山ノ口式土器が出土している例がある。また、天神段遺跡では刻目突帯文土器や入来式が出土し、堅穴住居跡も検出された。椿山遺跡と野方前段遺跡では、山ノ口式も出土している。分布調査、確認調査、工事立会でも弥生期の遺物が確認されていることから、北部台地及び山間部における弥生時代の集落が形成されている可能性は充分にある。

4. 古墳時代

本町の古墳時代の遺跡として中心的存在であるのは、横瀬古墳である。横瀬砂州上の砂丘帯を利用して5世紀半ばに構築された九州でも有数の大型の前方後円墳で、昭和18年に国の指定史跡となった。

昭和53～54年に行われた鹿児島県教育委員会文化財課の範囲確認調査で墳丘を廻る周溝の存在が明らかとなっている。周溝幅は約12m～約25mと推定されている。平成2年に行われた鹿児島大学と琉球大学の墳丘測量調査によれば、墳長132m、前方部幅72m、前方部長68m、後円部径64m、くびれ部幅48mを測ると報告されている。

平成22年～23年に大崎町教育委員会が行った範囲確認調査では、これまで確認されていた周溝の北側と南側に外側にさらに廻らされている幅約4mの周溝の存在が明らかとなつた。

平成27年4月30日の午前に肝付町へ東串良町～大崎町を襲った線状降水帯による一時的な豪雨で横瀬古墳後円部東側の一部が剥落し、墳体が一部露呈する被害があつた。この時、剥落部から円筒埴輪片が出土し、また露出した墳体面が湿地帯で採取したと想定される黒色土を基本として、黒色砂質層、褐色粘質層が所々に重なつていてる様相が確認できた。

明治31年に石室内の盗掘を受けている。盗掘者の証言により腐食した直刀や甲冑、勾玉類が出土し、石室内は朱塗りであったと記録されている。また、鹿児島県教育委員会の範囲確認調査では周溝の埋土から大阪陶邑産の須恵器が出土したほか、墳丘では円筒埴輪、形象埴輪片が採集されている。

板宿台地南端部に位置する神領遺跡群内には神領古墳群が所在する。前方後円墳4基（6号墳、10号墳、11号墳、13号墳）。うち6号墳は宅地造成のため消失。11号墳は国鉄建設により半壊、円墳9基（1～5号墳、7～9号墳、12号墳）。7号墳は平坦化。8・9号、12号については墳丘の形状が不明。）が存在する。また古墳群には地下式横穴墓も点在し、過去に調査が行われたものだけで8基が確認されている。13号墳を除いて、ほとんどが田原川を臨む台地の縁辺部に点在する。

6号墳では彷彿帆船鏡が出土し、宅地造成に伴い河口貞徳氏らによって昭和43年になされた調査では、石棺は花崗岩製の板石6枚を組み合わせたものと言われている。また、地下式横穴墓では、鐵劍、イモガイ製貝輪、鏡が出土している。

平成18年～20年にかけて鹿児島大学総合研究博物館による神領10号墳の発掘調査が行われた。この調査で神領10号墳が全長約50mの前方後円墳であることが判明し、周溝に4基の地下式横穴墓が存在することが分かつた。周溝から盾持人埴輪が発見された。またくびれ部では市場南組窯業の初期須恵器を大量に含む祭祀土器群が

出土した。

埋葬施設の調査では、戸火碎流の溶結凝灰岩製の削抜式舟形石棺が確認された。この石棺には6ヶ所の繩掛け突起があり、突起を含む最大長は277cm、最大幅128cmに及ぶ。石棺内は盗掘によりほとんどの副葬品は失われていたが、棺外に鉄劍、短甲の一節と、鐵鐵束などが発見された。これらの調査の成果から神領10号墳の築造時期は5世紀前半と推定されている。

同じ仮宿台地内の古墳群では、田中古墳群が存在する。3基の円墳が確認されているが、これについては未調査である。これらも田原川を臨む台地の縁辺部に立地している。仮宿台地内で確認されている古墳時代の墓域としては他に下堀遺跡がある。平成14年の大隅グリーンロード建設に伴う発掘調査では、地下式横穴墓が7基確認されている。副葬品として鉄劍、異形鉄器、鐵鐵束が出土し、墓周囲から大阪陶邑産の須恵器が確認された。

飯隈台地内には飯隈古墳群が存在する。神領古墳群とは異なり、台地の縁辺部ではなく、主に台地内部の小高い丘の頂部または微高地に点在するのが特徴である。1～3号墳は台地の平坦部もしくは微高地に立地する。4・5号と8・9号は『大崎名勝誌』で記すところの「鷺塚山」に立地する。鷺塚山とは、南北約500mにわたって延びる台地上の丘陵で、古墳はその尾根に点在する。また6・7号は鷺塚山より北西へ約400m離れた丘陵の頂上に立地する。

3号・4号・8号・9号は全壙もしくは半壙の状態である。8号は前方後円墳であったが、「戰時に分かれ円墳化」と『大崎町文化財要覧』に記されているが、鷺塚山が半分造成をうけたため、8号墳の本来の姿をうかがい知ることはできない。

また永吉台地南端部の東串良町境近くには鷺塚地下水横穴墓が存在する。昭和59年に町道拡幅で発見され、河口貞徳によって調査された。

古墳時代の調査で集落跡の調査を行った例は多くないが、二子塚A遺跡では古墳時代の住居跡が確認されている。また、東九州自動車道建設に伴う発掘調査では、永吉天神段遺跡で、東原式、辻堂原式、須恵器が出土した。

5. 古代

本町の仮宿に都萬神社がある。もともとは「妻萬神社」であった。志布志市有明町原田にあったものが、1540年の戦火により焼失し、現在の場所に移遷したものである。妻萬神社は古代日向国5郡（臼杵郡、児湯郡、那珂郡、宮崎郡、諸県郡）ごとに設けられ、諸県郡に設置された妻萬神社が、本町にある現在の都萬神社である。また、飯隈地区には、743年には聖武天皇によって勅願所とされたと伝えられている飯隈山三權現社が存在していた。聖護院と深い関わりがあったことが『大崎名勝誌』

からも窺える。古代期にも主要な地域であったと推測され、今後の調査成果が期待される。近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査で古代集落の様相を考える貴重な資料が発見されつつある。

天神段遺跡では、土師器や墨書き土器、刻書土器、製塗土器などの遺物のほか、掘立柱建物跡や堅穴状遺構、土坑群などが見つかっている。他、北部では加治木塚遺跡、椿山遺跡、野方前段遺跡で古道や構造遺構が確認されている。

また、麦田下遺跡では遺物だけであるが墨書き土器2点が出土している。

6. 中世～近世

中世の山城として、神領遺跡群に所在する井出田城跡、龍相城跡、旧大崎城跡がある。文永13年（1488年）に肝付本家を離反した肝付兼光によって龍相城より北側に中心を移し、大崎城（後に新に築城される大崎城に対して「旧大崎城」と呼ぶ。）を構えた。井出田城、龍相城の築造時期は不明であるが、鎌倉期に構築されたものと推測されている。南北朝時代に龍相城は、南朝方の榎井氏が拠った城で、後述する胡摩ヶ崎城の南方を固めていたと伝えられている。

肝付氏が島津氏に降伏した後の、天文5年（1576年）大崎城は島津方の武将の支配を受けるが、翌年に現在の大崎小学校北側に拠点を移し、新に大崎城を築城した。ここは近世以降大崎郷の地頭仮屋となつた。

仮宿台地の西側に南に突き出した舌状台地がある。この舌状台地の一部が胡摩ヶ崎城で、鎌倉期築城と推定している。南北朝時代には、榎井頼重が拠った城であり、頼重は北朝方の武将に攻め込まれ、この地で命を落としたと伝えられている。

胡摩ヶ崎城西方の持留川対岸にも、永吉台地から突き出した舌状台地があつて、ここには野御城があつた。現在は大半が現代のシラス採取で破壊されている。ここは胡摩ヶ崎城の西方を固める城であったと考えられる。本町の菱田地区にも菱田川を見下ろす台地の縁片部に立地する天守城は胡摩ヶ崎城の東方の防衛を担っていたと考えられている。胡摩ヶ崎城の北方を固めていたと言われている天ヶ城は岡別府にあつたと伝えられる。

永吉台地南部の横瀬古墳を臨む舌状台地は、柏谷城のあったと推定される場所である。莊園の弁済使であった肝付氏に対して、鎌倉期に新たに配置された幕府の地頭名越氏が築城した城と考えられている。

金丸城跡は田原川上流域の仮宿台地縁辺部、志布志市有明町境に立地する。志布志市有明町蓬原にある教仁郷氏の居城である蓬原城と関連していたと言わわれている城で、延文4年（1359年）に蓬原城が島津氏久に攻められ落城した時に、この城も落城したと言わわれている。

平成12年に大隅グリーンロード建設に伴う金丸城跡の調査が行われた。台地で環状に配列する掘立柱建物跡が確認された。遺物はいずれも近世の陶磁器類が出土したのみで、城の時期に相当する遺物が無かつたため、掘立柱建物跡が城に関する施設かどうかは判断できなかつた。その他、近世墓が出土している。

また、台地裾部は田原川より小高い地形を呈しており、ここでは焼土を伴う土坑、貯水に用いられたと推測される土坑、多数の柱穴が出土した。焼土を伴う土坑は「カマド」に類する形状を呈している。この土坑が連なる場所の近くに軽石や破碎した土坑の炉部分の集積が認められ、その中に鉄滓や羽口が出土したことで、鉄製産業関連の遺構も想定したが、焼土を伴う土坑そのものが鉄を扱っている痕跡は見つからなかった。

東九州自動車道建設に伴う発掘調査では、天神段遺跡で掘立柱建物跡や土坑、柱穴が多量に発見され、土坑墓からは青磁、白磁、青白磁、土器類、東播系須恵器、黒色土器、滑石製石鍋、鉄製品、鏡などがまとまって出土した。これらの出土品は平成28年に県の指定文化財となつた。

参考文献

- 平成12年に大隅グリーンロード建設に伴う金丸城跡の調査が行われた。台地で環状に配列する掘立柱建物跡が確認された。遺物はいずれも近世の陶磁器類が出土したのみで、城の時期に相当する遺物が無かったため、掘立柱建物跡が城に関する施設かどうかは判断できなかった。その他、近世墓が出土している。

また、台地裾部は田原川より少し高い地形を呈しており、ここでは焼土を伴う土坑、貯水に用いられたと推測される土坑、多数の柱穴が出土した。焼土を伴う土坑は「カマド」に類する形態を呈している。この土坑が連なる場所の近くに軽石や破砕した土坑の炉部分の集積が認められ、その中に鉄滓や羽口が出土したこと、鉄製産闇連の遺構も想定したが、焼土を伴う土坑そのものが鉄を扱っている痕跡は見つかなかった。

東九州自動車道建設に伴う発掘調査では、天神段遺跡で掘立柱建物跡や土坑、柱穴が多量に発見され、土坑墓からは青磁、白磁、青白磁、土器類、東播系須恵器、黒色土器、滑石製石鏡、鉄製品、鏡などがまとまって出土した。これらの出土品は平成28年に県の指定文化財となつた。

(参考文献)

 - ・大崎町教育委員会(1989年)『神領城下式横穴群5号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書
 - ・大崎町教育委員会(1992)『神領地下式横穴群6号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
 - ・大崎町教育委員会(2001)『立山B道路』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
 - ・大崎町教育委員会(2004)『金丸城跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
 - ・大崎町教育委員会(2005)『下原道路・大崎細山田段道路』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
 - ・大崎町教育委員会(2006)『美堂A道路』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
 - ・大崎町教育委員会(2014)『麦田下道路』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
 - ・大崎町教育委員会(2015)『高久田A道路』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
 - ・大崎町教育委員会(2016)『横瀬古墳』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
 - ・鹿児島県立埋蔵文化財センター(2003)『後追道路』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(66)
 - ・鹿児島県立埋蔵文化財センター(2004)『二子塚A道路』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(84)
 - ・鹿児島県立埋蔵文化財センター(2010)『加治木瀬道路・宮ノ本道路・椿山道路・椿木段道路・野方前段道路A地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(154)
 - ・鹿児島大学総合研究博物館(2007)『鹿児島大学総合研究博物館News Letter No.15』
 - ・鹿児島大学総合研究博物館(2008)『鹿児島大学総合研究博物館News Letter No.19』
 - ・鹿児島大学総合研究博物館(2009)『鹿児島大学総合研究博物館News Letter No.22』
 - ・佐野邦断二(1951)『大崎町史』(株)ベリカル社
 - ・公益財团法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センター(2015)『天神段遺跡』弥生時代・近畿編』公益財团法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(3)
 - ・公益財团法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センター(2016)『天神段遺跡』(神戸時代前期・二期編)『公益財团法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(6)
 - ・水迫敏郎・奥野光・森嘉廣・新井房久・中村俊介(1998年)『肝付平野の形成-テラフアとAMS-14Cによる』
 - ・中村耕治也(1990)「大隅地方の古墳調査-埴丘測量を中心として(1)曾於郡大崎町 横瀬古墳」『鹿児島考古』第23号 鹿児島県考古学会



第3図 木崎町における地質図（鹿児島県地質図を改変）



第4図 飯隈遺跡群・大園・浜牧・夢池遺跡及び周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	地形	主な時代	遺物・遺構	備考	
1	稻荷塚A	菱田	稻荷塚	台地	弥生・古墳	H25 東九州自動車道建設に伴う確認調査。遺構・遺物無し。	
2	稻荷塚B	菱田	稻荷塚ほか	台地	古代	HII1 農政分布調査。	
3	牛ヶ迫	神領原	牛ヶ迫・戸戸原	台地	弥生・古墳	HII1 農政分布調査。	
4	飯隈遺跡群	神領	台地	弥生・古墳・中世	飯隈古墳群 円墳9基(1~9号) 地下式横穴墓群 飯隈地区I~24号地下式 横穴墓群	1号一部宅地で削られる。3・4号 畠地造成で大半消失。5・8・9号號 塚山山頂にあり。8・9号シラス採取 で半壊。 S37 新地整理で4基調査。2基舟形 鍾石製組合せ式石棺、人骨、直刀、 刀子出土。 H22・23年鷹塚地区的確認調査。(1 ~19号) H27 ~ 28, 20 ~ 24号掘 調査。刀子・劍・人骨・貝鏡出土。 H8 農政分布調査。	
5	高尾B	神領	高尾	台地	古墳	「資料科学研究所報告」49号。H25 県営農業事業農道整備工事に伴い、 確認調査。遺構・遺物無し。	
6	高尾A	神領・菱田	高尾・馬見岡	台地	縄文(後)		
7	大園・浜牧・ 夢池	大園・浜牧・ 夢池	台地	弥生・古墳・平安	成川式土器・住居跡1基	H25 県営農業事業農道整備工事立 会いで、住居跡1基調査。	
8	沢貝	益丸	松原	砂丘	縄文・弥生・古墳初 頭	入来1・2式土器・山ノ口1・ 2式土器・中津野式土器・須 恵式土器・集落跡	HII1 砂採取事業に伴い発掘調査。
9	田原B	益丸	川路	台地	古墳		
10	王子脇	益丸	王子脇・川路	台地	古墳	HII1 農政分布調査。H8 照営經營体 事業に伴い、確認調査。	
11	別府下	益丸・神領	別府下・梯渡	沖積地	古墳	HII1 農政分布調査。H8 照営經營体 事業に伴い、確認調査。	
12	平良宇都B	井俣	平良宇都	沖積地	弥生(前・中)・古墳	H25~26 東九州自動車道建設に伴 い塗掘調査。	
13	平良上C	井俣	平良上	台地	弥生・古墳	集石遺構・住居跡等	
14	平良宇都A	井俣	平良宇都・平 良上	沖積地	古墳	HII1 農政分布調査。H8 照営經營体 事業に伴い、確認調査。	
15	平良上A	井俣	平良上・平田	台地	縄文・古墳		
16	平良上B	井俣	平良上	台地	古墳		
17	井俣和田	井俣	和田	沖積地	古墳	成川式土器	HII1 農政分布調査。H8 照営經營体 事業に伴い、確認調査。
18	井俣牧	井俣	牧	台地	弥生・古墳	土器	HII1 農政分布調査。
19	金丸城跡	井俣	小牧・金丸	台地・沖積地	中世	磯(保)・古墳・古代・中世・ 近世の土器・陶磁器類・燒土 を伴う土坑・柱穴群等	大隅グリーンロード建設に伴い、 HII1~12 に本調査。
20	干浅	井俣	干浅	台地	弥生・古墳		
21	堂園塚	井俣	堂園塚	台地	弥生・古墳		
22	宮脇	井俣	宮脇	台地	古墳・古代		
23	坂上	井俣	坂上	台地	弥生・古墳		
24	柿木	井俣	柿木	台地	弥生・古墳		
25	田中古墳群	井俣・神領	田中・堂地	台地	古墳	円墳3基	
26	田原A	神領	田原	沖積地	弥生(中・後)		
27	神領遺跡群	神領・横瀬	台地	弥生・古墳・中世	神領古墳群 円墳9基(1~5, 7~9, 12号)、 前方後円墳4基(6~10, 11~ 13号) 地下式横穴墓群 井出田城跡 龍城城跡 肘大崎城跡	6号は宅地造成で消失。10号はHII8 ~20に鹿児島大学総合研究博物館 発掘調査。11号は国鉄のために半壊。 これまでに8基調査。 文明初期肝付兼光塗成。	
28	徳園	横瀬	徳園	沖積地		II「横瀬遺跡」	
29	東之峰A	横瀬	溝下	沖積地	弥生(中)	II「東之峰遺跡」	
30	東之峰B	横瀬	東之峰・宇田原	砂丘	古墳	II「横瀬遺跡」	
31	横瀬古墳	横瀬	エサイ町	砂丘	古墳	円筒埴輪・形象埴輪・大阪陶 色系須恵器など	S18 国指定。 SS2・53 鹿児島県教育委員会周辺 確認。 H22・23 大崎町教育委員会外確認。
32	大塚	横瀬	大丸	砂丘	弥生・歴史		
33	浜田	横瀬	浜田	砂丘	古墳		
34	琵琶地下式横 穴墓群	永吉	小牧	台地	古墳	人骨・刀子	S59, 2, 25 町指定
35	堂地迫	永吉	堂地迫	台地	古墳・中世		
36	京ノ峰	永吉	京ノ峰	台地	縄文・弥生・古墳	相4町道拡張のため工事立会。相 (板垣)遺跡	
37	梅谷城跡	永吉	枝道	台地・沖積地	弥生(中)・古墳・中世	縦合期に大隅守護源氏堀留城か?	
38	大崎城跡	飯宿	城内ほか	台地	中世末・近世		
39	胡麻ヶ崎城跡	飯宿	古城	台地	中世(室町)	権井氏の城	
40	美堂B	飯宿	胡摩	台地	古墳		
41	美堂A	飯宿	美堂	台地	古墳・中世・近世	成川式土器・古道 大崎中央農道建設に伴いHII4 本調査。	

第3章 調査の方法

第1節 発掘調査の方法

1. 大園・浜牧・蓼池遺跡の工事立会・発掘調査方法

No.6～No.10まで工事立会を行った。重機で無遺物層を除去し、遺物包含層から少しづつ掘り下げを行った。遺物が確認されたところは遺物を採取し、遺構プランが確認されたら、その検出面で削除を止めるという方法を行った。工事立会いで、遺構プランが検出された箇所以外は工事計画に基づく掘削深さまで下げた。

工事立会いで検出された遺構プランは、人力で精査を行い、セクションベルトを設定後に埋土の掘り下げを行った。埋土中及び床面の遺物の出土状況、貼り床面の状況、掘り込み面の状況については、カラー写真を1眼レフデジタルカメラを用い、白黒写真をフィルムカメラで写真撮影した。また1/10の実測図面も作成した。

その他、調査区壁面に残る堅穴住居跡の断面を含め、土壠断面図も1/10で作成した。遺構配置図については、No.杭は調査区外に設定されている仮杭を参考とし、平板を用いて1/50の図面を作成した。また標高もこの仮杭に記されている仮ベンチを利用した。

2. 飯隈遺跡群の発掘調査方法

調査対象区における基準点は、工事計画におけるセンター杭を利用した。朝日開発コンサルタント株式会社に委託をして、工事中心点No.7～10の復元を行った。各No.杭には世界公共座標と海拔絶対標高が与えられている。各杭の座標は25～26頁第5章第12～13図中に示している。

調査は、あらかじめ確認調査で分かっている地下式横穴墓1号と20号についてはトレレンチの跡をもとに、堅坑の位置を探し出し、位置を確認できた箇所は堅坑の平面プランが完全に現れるまで範囲を広げ、人力で検出層まで掘り下げた。

また、後に未発見の地下式横穴墓を確認するため、確認調査前に実施した範囲以外の地中レーダ探査を株式会社しろやまに委託して実施し、さらに11T附近～No.10までの範囲をアカホヤ火山灰層まで重機で掘り下げ、未発見の地下式横穴墓及び他の他の遺構プランの精査を行った。ただし、地下式横穴墓23号は給水栓とその引込み栓によって本調査中に確認されず、後の工事による陥没で発見されたものである。その場合、再度陥没地点周辺を精査し、堅坑を検出した。

堅坑が確認された箇所についてはセクションベルトを設定し、堅坑の掘り下げを行った。セクションベルトについてはその埋土堆積状況を写真撮影し、1/10の実測図を作成した。

玄室内は崩落または剥落による土を丁寧に除去し、床面を精査した。玄室内の人骨及び副葬品については写真撮影後1/10の実測図面を作成した。また、地下式横穴墓内に残る壁面の工具痕も実測図面に反映した。

地下式横穴墓1号と20号の実測図面作成は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。地下式横穴墓の配置図は基準杭をもとにトータルステーションで座標を割り出し、作成を行った。

人骨については実測図面作成を鹿児島女子短期大学の竹中正巳氏が実測図面を作成し、後に整理指導を仰いだ。また、鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也氏に副葬品についての指導を仰いだ。

写真撮影については、堅坑の写真は1眼レフデジタルカメラ及び35mmフィルムカメラによる白黒・リバーサルフィルム撮影を行った。玄室内は1眼レフデジタルカメラ及び6×6フィルムカメラによる白黒・リバーサルフィルム撮影を行った。

第2節 整理・報告書作成作業の方法

1. 洗浄・注記・接合

大園・浜牧・蓼池遺跡の遺物は、洗浄後遺跡名(「OHT」表記)、取り上げ番号を注記した。その後取り上げ番号と実測平面図をもとに分類し、土器片の接合を行った。土器の復元ではセメダインCで土器を接合させ、接合部や、欠損部などの補強・復元には止水・修復用セメント「デンカキューテックス」を用いた。

飯隈遺跡群の出土遺物には、地下式横穴墓の副葬品として鉄製品がある。これらについては、付着する木質や繊維質などの有機物に注意しながら、付着している土を竹串や筆を使って除去した。

2. 遺物実測図作成と遺構・遺物トレースの方法

遺物の実測は、原寸大で作成した。大園・浜牧・蓼池遺跡出土の土器については、断面の展開を基本とした。石器や土製品は裏面・断面の展開を基本とするが、必要に応じて調整・施文及び使用痕のあるところは固化した。

飯隈遺跡群地下式横穴墓出土の鉄製品・貝製品は裏面・側面の展開を基本とし、刃部、基部等の要所について断面実測を行った。鉄製品についてはX線写真の画像も参考にし、画像から読み取れる原形のラインも反映させた。

土器のトレースは、実測原図を等倍で複写し、製図用ペンでトレースを行った。線種は基本的に断面を0.4mm、外形ライン0.4mm、器面の強い稜線を0.3mm、弱い稜線を0.2mmもしくは0.1mmで表現し、ハケメ・ケズリ、原体幅を0.1mm、原体内の木目は0.13mmで、ミガキ、指

頭圧痕などは0.13mmで表現した。展開図における中央線は0.3mmを用いた。石器、土製品のトレースは遺物の大きさに応じて、原寸大または縮小して複写し、製図用ペンでトレースを行った。線種は、外形ライン0.3mm、強い稜線0.1mm実線、弱い稜線を0.1mmまたは0.13mmの破線、石器の使用痕を0.13mmで表現した。

鉄製品も原寸大で複写し、トレースを行った。線種は、鉄身及び付着する繊維質、木質の外形ラインを0.4mmでし、繊維や木目などを0.13～0.1mm、鋸齒を0.2mmで表現した。また、強い稜線は0.1mm実線、弱い稜線は0.1mmまたは0.13mmの破線を用いた。

遺構の実測図、配置図等はスキャナーで図面を読み込み、フォトショップで歪みを補正した後、補正した図面をイラストレーターで合成し、デジタルトレースを行った。見通し断面図は、レベル数値と実物及び写真を参考に整理作業段階で作成した。

3. 遺物写真撮影

遺物の写真撮影は4×5mmフィルム用カメラを用いて撮影を行った。土器は型式及び器種ごとで撮影を行い、完形もしくは完形のイメージしやすいものは立面で撮影し、小片のものは俯瞰で撮影した。また特徴のある箇所については接写を行った。

写真撮影は鹿児島県立埋蔵文化財センター写場で行った。

4. 鉄器処理

飯隈遺跡群地下式横穴墓出土の鉄製品については、鹿児島県立埋蔵文化財センターで脱塩処理から樹皮の注入による処理を行った。

5. 整理指導

飯隈遺跡群における地下式横穴墓の人骨の洗浄・接合は鹿児島女子短期大学の竹中正巳氏が行った。また、写真的レイアウトや、写真撮影においても指導を仰ぎながら行った。

鉄製品の処理については、鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・助言を得た。

6. 飯隈遺跡群出土地下式横穴墓の報告の方法について

飯隈遺跡群内には飯隈古墳群・地下式横穴墓群が存在する。そのうち小字「鷺塚」に分布する地下式横穴墓は、「飯隈鷺塚地区○号地下式横穴墓」としている。本報告書では飯隈鷺塚地区で発見された地下式横穴墓の通し番号を採用した。

なお、名称が長いため本報告書では「○号地下式横穴墓」と略称する。また本文中では、「○号」と表記する箇所があるが、いずれも地下式横穴墓の番号を指している。



写真1 大園・浜牧・蓼池遺跡発掘調査作業風景



写真2 飯隈遺跡群発掘調査作業風景



写真3 整理作業風景

第4章 大園・浜牧・蓼池遺跡の発掘調査の成果

第1節 層序

大園・浜牧・蓼池遺跡における基本土層は以下のとおりである。

I層 表土。現農道の砂利など。

II層 白色軽石混黒褐色土。

III層 黒褐色土。

IV層 黒色軟質土。

V層 黄色軽石粒子混黑色土。

VI層 黑褐色土。

VII層 池田降下軽石層 (I k-p)。池田カルデラを起源とする池田湖形成に伴うテフラ。約6,400年前。

VIII層 アカホヤ火山灰層 (K-Ah)。鬼界カルデラを起源とするテフラ。約7,300年前。工事区No.8～BPにかけては、火山灰層中に1～5cm角の白色軽石を多く含む傾向がある。

IX層 にぶい黄褐色土。

X層 黒褐色土。

XI層 淡黄色火山灰層 (Sz-S)。P-14。桜島北岳の噴火によるテフラ。約12,800年前。

XII層 にぶい褐色粘質土。下層は上層よりやや暗い。

第2節 確認調査の概要（第5図）

確認調査における確認トレンチの配置図は第5図のとおりである。工事計画地内に14箇所（1～14T）のトレンチを設定し、重機で少しづつ掘り下げた。調査の掘削深は概ね工事による掘削深を基本とした。事業区南端のNo.15からEPまでは民家のブロック塀に囲まれているうえ、コンクリート舗装がされていたため、トレンチ設定は断念した。

BPからNo.15まで20～30m間隔を基本にトレンチを設定し、確認調査はNo.15付近からBPに向けて進めた。各トレンチにおける堆積層の厚さを計測した。遺構・遺物が出土した場合は出土層と地表面からの深さを計測した。

1. 1～3T

1TではI層の下層はIX層、2TではXI層、3Tではシラス層と考えられる黄橙色火山灰層まで削平されていた。造成を受けている。遺構・遺物は確認されなかった。

2. 4～6T

1～3Tと同じく造成を受けているが、4TでI層下はV層、5, 6TではIV層と北西に行くにしたがって削平の深度も浅くなる。遺構・遺物は確認されなかった。

3. 7～8T

この区間はほとんど削平は受けていない。7TではIV層で土器片が確認され、プランが検出された。ただし、プランは不定形で、掘り下げを行ったところ、わずか5cm程度の掘り込みであったため、詳細は不明である。このプランは本事業区外で確認されており、後の工事立案会でもそのプランに統くプランは確認されなかった。

8TのⅣ層は、部分的に1～5cm角の白色軽石を多く含む層があり、当初は何らかの遺構プランかと思われたが、9T, 11Tでも同じようにVII層中に1～5cm角の白色軽石が見られたので、この周辺のVII層の特徴と判断した。

4. 9～14T

基本的に上層は造成によりII層～VI層もしくはVII層は削平されている。11TではVII層上面が北東から南西にかけて下り勾配となっていた。

遺構・遺物は確認されなかった。

第3節 事業区周辺の分布調査

確認調査で遺物が確認されたのは7Tだけであり、事業区における遺跡の有無と範囲が不明瞭なため、確認調査に併せて周辺の分布調査を行った。事業区No.7～9の東側にあたるビニールハウス周辺に多量の土器片が散布しており、ビニールハウスの経営者に聞き取りを行った。経営者の話によれば、ビニールハウスを建てる際に、耕作地面を50cm掘り下げ、耕耘をかけたところ、土器片が多く出土したとのことであった。アカホヤ火山灰が露わになったという話から、耕耘はVII層まで及んでいると考えられる。

確認調査では7Tだけ遺物が確認されたが、ビニールハウスが立地している場所に遺構・遺物が多く存在する可能性がある。地表面から50cm程度VII層が現れるほど掘り返されているので、大部分は削平を受けていると思われるが、遺構の底部は残存している可能性もある。

第4節 工事立案会の概要（第6図）

本調査に着手するには、事業区内における遺跡の有無と範囲が確認調査で明確にできなかつた。しかし分布調査と聞き取りの内容から、隣接する場所には遺跡が存在すること明らかだつた。確認調査では確認できなかつた遺跡の広がりが事業区内に存在する可能性も充分考えられたため、工事着手前の取り扱いについては県文化財課及び大隅地域振興局農林水産部曾於畠かんセンターと充分協議を重ねた。

本調査計画を立てるには確かに根拠が無いため、工事立案会を行い、遺構が確認され次第、速やかに本調査を行うこととした。工事立案会は9Tを設定したNo.5周辺から5Tを設定したNo.11周辺までのIV層が残存する範

間を対象とした。

工事立会いでは、No.6 +15.00 m と No.7 間で土器片が出土し、Ⅶ層上面で 3×3 m 程度の池田降下軽石やアカホヤ火山灰粒子・ブロックを含む黒褐色土を埋土とする方形プランを確認した。ただし、それ以外の範囲では遺構・遺物は確認されなかった。

第5節 本調査の概要

1. 遺構（第7図）

遺構検出段階で、2つの小型の鉢形土器が「入れ子」状態で出土した。一部重機の掘削を受けて破損をしている。ほか埋土中に高杯や壺形土器片などが出土した。また、遺構の南西部の床面近くで大型の石が出土した。のちの整理作業で敲打痕が確認されたので、台石として使用された石器と判断した。遺物は遺構の南側半分にのみ出土する傾向があった。また、南側壁面から遺構中心部にかけて土器の出土する位置が床面に近くなっている傾向もあった。このことから、遺構廃絶後、掘り込みの外側から遺物が流れ込んだ様相が想像できる。可能性として、遺構の掘り込みの周囲に積み上げた盛土が、遺構の廃絶とともに掘り込み内に流れ込み、それに伴って盛土部に設置していた土器が流れ込んだのではないかと推測する。

床面には遺構中央部から西側壁面にかけて硬化面が確認された。硬化面の一部は西側壁下まで及んでいた。また、遺構の壁面下を巡る溝状のプランも確認できた。

調査ではこの遺構を住居跡と判断し、壁面下を巡る溝状のプランは壁帶溝として、さらに貼床面を掘り下げ、掘削面で壁帶溝の精査および、柱穴痕の検出を試みた。

壁帶溝は概ね上端幅 15 ~ 25 cm、下端幅は 5 ~ 10 cm、掘り込みの深さは 5 ~ 7 cm 程度であった。壁帶溝が唯一途切れる箇所が西側壁面にあって、それはちょうど貼床面が西側壁面に接する場所でもあった。このことから、この箇所が住居の出入口であったと思われる。

貼床面及び掘り込み面で柱穴痕の検出を試みたが、現存する範囲では確認されなかつた。烟かんのバイブルайн埋設によって幅約 1 m は住居跡をたすき掛け状に破壊されている。バイブルайн埋設に伴う掘り込み部分もシラスを除去し、柱穴痕を精査した。バイブルайнの掘り込みは、住居跡床面の高さから 20 cm 程度の深さまで及んでいた。主柱穴痕などはさらに深く掘っていると想定されるので、柱穴の底部が残存する可能性もあったが、実際は確認されなかつた。

埋土中にはところどころ炭化物が確認された。床面に近いものもあれば、埋土中のものもあった。また、中央東部分に炭化物片を含む焼土が確認されたが、不定形であり、実態は不明である。すでに烟かんのバイブルайн

によって削られている範囲に何かしらの痕跡が残存していたのかもしれない。これらの炭化物の出土状態や内容から、火災焼失した住居跡の印象は受けなかつた。

セクションベルトで埋土状況を確認した。黒褐色土に池田降下軽石やアカホヤ火山灰の粒子・ブロックを含む埋土であったが、実際は烟かんバイブルайнで削られている範囲も大きく、充分に検証することが困難であった。残っているセクションベルトの観察では、特に明瞭に分層できる内容ではなかつた。ちなみに貼床を形成する土も埋土の内容とほぼ変わらなかつた。

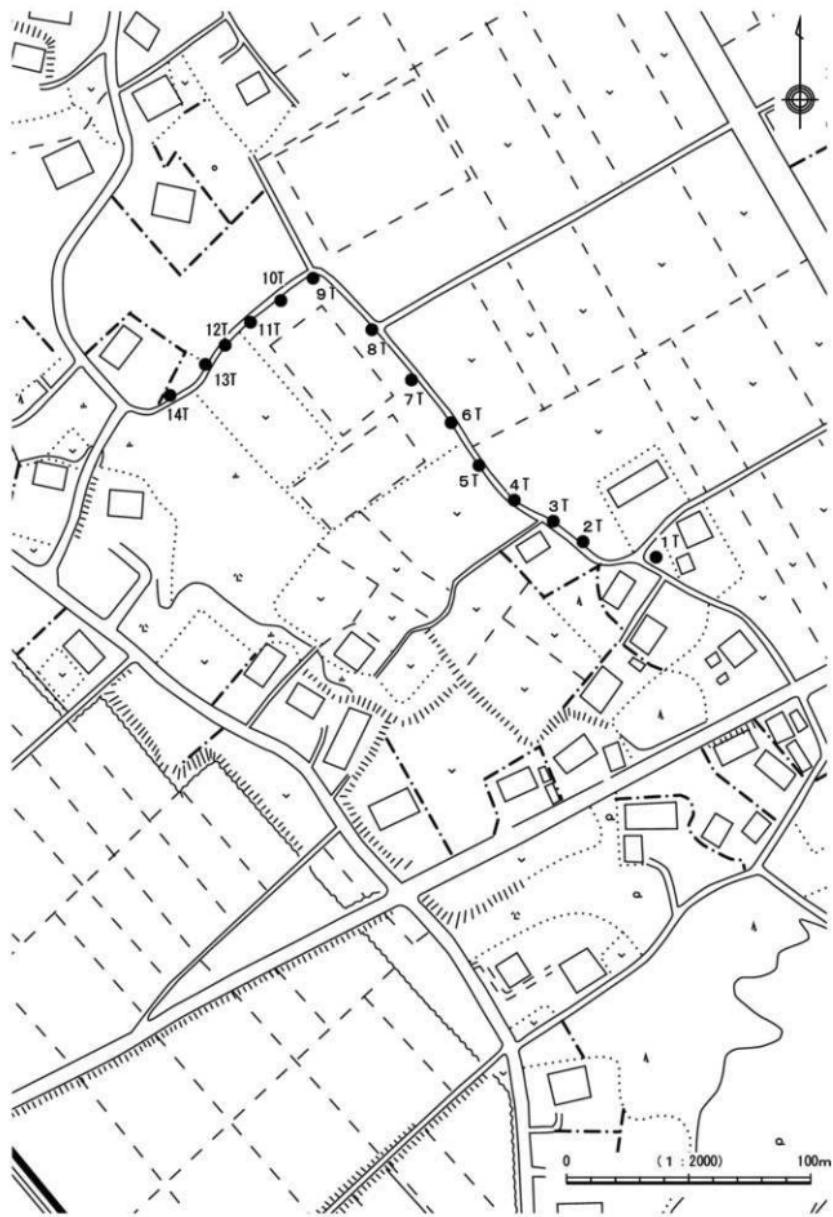
なお、住居跡の北東コーナーは事業区外にあるため調査ができなかつたが、調査区東側壁面で土層堆積状況を観察するとともに、実際の住居の掘り込みがどの層からなんているかを検証することができた。

検出はVI層上面で行つたが、IV層上面あるいはIII層下部から実際は掘り込まれていた。コーナーの部分の埋土については、色調による明瞭な分層は難しいが、アカホヤ火山灰ブロック・粒子の含有量と土質で分層をすれば、2つの大きな層に分けられる。1つは壁面から住居跡の内部側にかけて、アカホヤ火山灰の粒子・1 cm 角のブロックが多く含まれる柔らかめの黒褐色土が堆積する。この土は壁面から住居跡内部に向けて流れ込んだような傾斜を呈する。2つ目の層は上記の層を埋めるように堆積しており、3 ~ 5 cm 角のアカホヤ火山灰ブロックと池田降下軽石を含む黒褐色土である。この層によって住居跡は完全に埋没している。

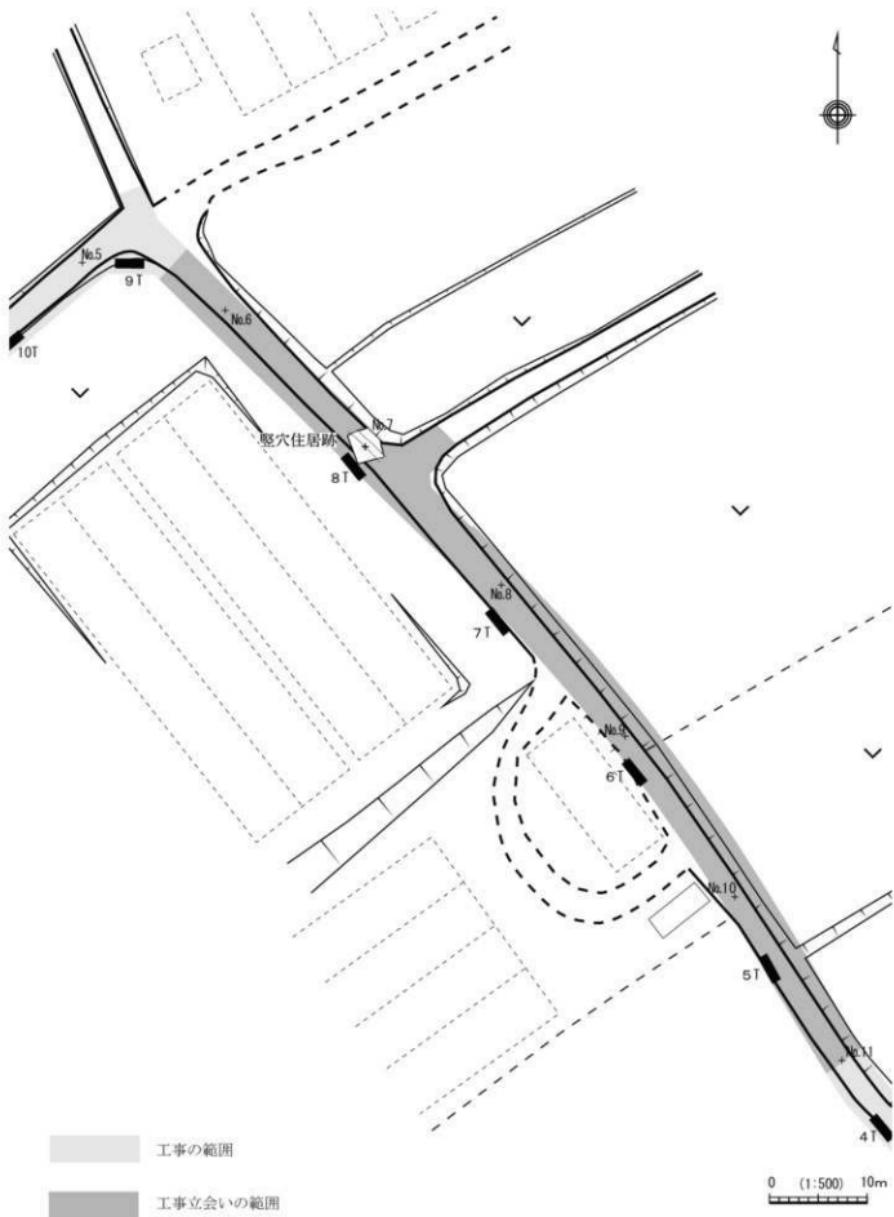
この住居跡は南壁推定 2.7 m、西壁 3 m、北壁が残存部分で 2.2 m、推定で 3.2 m、東壁が推定 3.4 m を測る。平面形は北壁がやや広めであるが、ほとんど正方形に近いと言える。

貼床に関しては先述したとおり、構成する土の色調や内容は廃絶後の埋土とあまり大きな差はない。かろうじて硬化面のある部分は硬化面と掘り込み面との高さの差を貼床の厚みと判断できる。ただし、硬化面の無いところは貼床の厚みは不明瞭である。

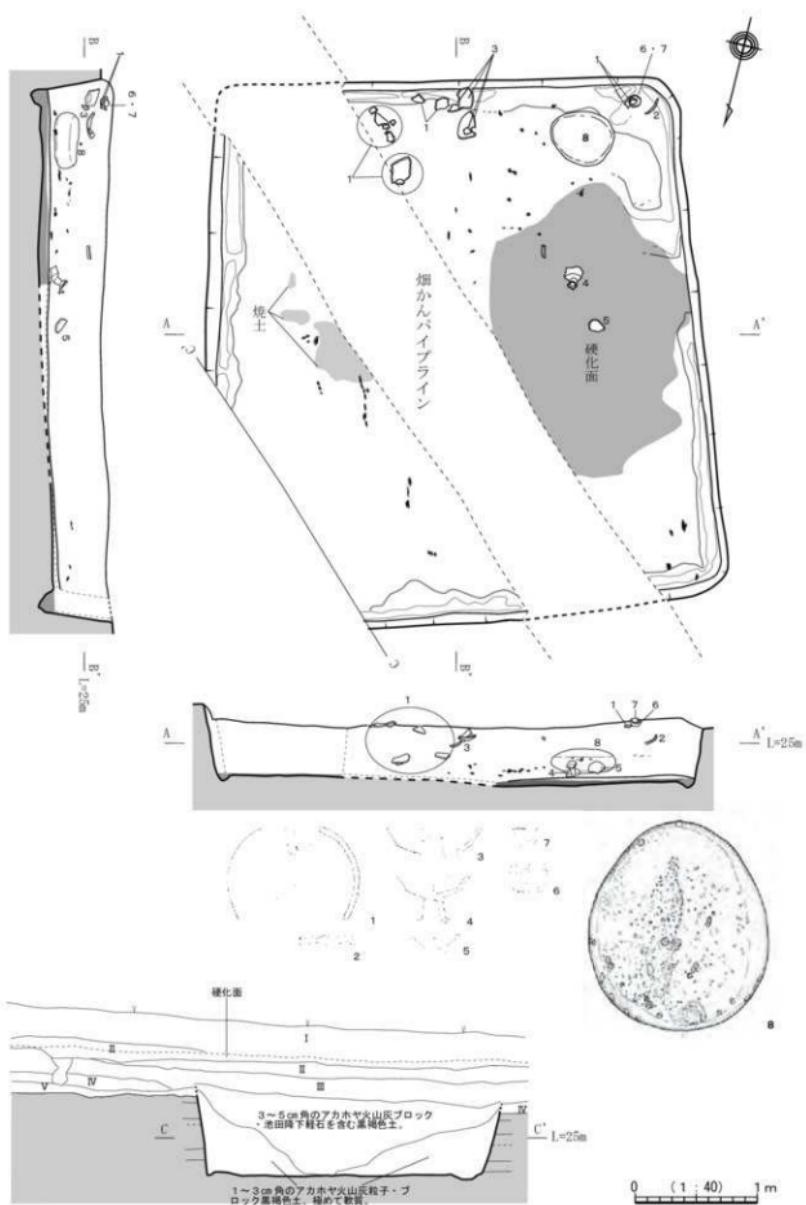
可能性として、出入口付近に関しては、住居使用中に回んしまった範囲により厚く土を入れ、そのことによって貼られた床が厚みを増したと考えられる。あるいは住居跡南西部分の掘り込み面のレベルが低いため、貼床を行つことで、住居の床面を水平にしたと考えられる。



第5図 大園・浜牧・夢池遺跡におけるトレンチ配置図



第6図 大園・浜牧・夢池遺跡工事立会い及び造構配置図



第7図 積穴住居跡実測図及び調査区東壁面土層断面図

2. 積穴住居跡内出土遺物（第7図）

住居跡内の遺物には、床面直上出土のものは無かった。先述したように、遺物は遺構の南側半分にのみ出土する傾向があった。また、南側壁面から遺構中心部にかけて土器の出土する位置が床面に近くなっている傾向もあった。

高杯4・5は縦化面のある床面に近い埋土中にあった。石器8は住居南西壁際で出土した大型の石器で、これも床面に近い埋土中にあった。壺形土器1の大部分の接合資料は南壁際の遺構検出面で出土したが、住居跡南側壁面からやや内側で出土した接合する土器片は、床面に近い埋土から出土した。さらに、鉢形土器6・7の下に出土した土器片も1の接合資料である。

(1) 土器（第8図 レイアウト番号1～7）

1は壺形土器の肩部から胴部である。外器面は工具によるナデ調整がされており、肩部は横方向、胴部は縱と斜め方向に施されている。内器面も工具による横方向のナデ調整がされているが、粘土帶の接合痕が残る。粘土帶の幅は3～4cm程度である。

2は壺形土器または、壺形土器から剥離した刻目突帯である。粘土帶幅は約2cm、厚さは最大厚約1cmの断面梢円形のものを貼り付け、刻目を施している。刻目には布目压痕が残っている。土器の接着面は横方向の指ナデ調整を行っている。粘土帶の両端を合わせた際の接合部が確認できる。両端部を尖らせた形に整形し、重ねて接合していることが分かる。

3～5は高杯である。3は杯部である。口縁部はやや外反する形で、口唇部を丸く整形している。外器面は口縁部と受部を接合する部分で屈曲し、受部の上端部によって、屈曲部に強い稜線を作っている。内器面は明瞭な稜線ではなく、受部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。

杯口縁部の外器面は指オサエによる調整を施した後、横方向にナデ調整を行っている。杯受部は横方向のナデ調整後、斜め、縱方向の棒状工具でナデ調整を施している。内器面は指オサエの後に横方向に板状工具によるナデ調整を施しているが、光沢を持っているため、ミガキ調整に近い。

なお、受部下端断面は脚部が外れた状態の接合面が露になっている。

4の口縁端部と脚底端部は残存していない。杯部は受部と口縁部の接合する部分で大きく屈曲し、外器面、内器面ともに強い稜線を作う。口縁部は大きく外反する。脚部は筒状を呈し、端部に向けてL字に外向する。

杯部は内外器面とともに指オサエ調整後板状工具のナデの調整を行っている。脚部は外器面はミガキを施すが、紙、斜め方向のナデ調整を重ねている。内器面は指オサ

エ調整とナデ調整を行っている。

5は杯の受部である。底は厚く作られている。外器面は指オサエ調整後ナデ調整を施す。内器面は板状工具によるナデ調整を施している。脚部とは接合部分で外れていて、5の下面では脚部との接着面が観察できる。外器面表面3～5mmの厚さの範囲は杯部側から脚部に接着させるために延ばした粘土の断面である。外器面表面から3～10mmの範囲はナデ調整が見られる。この部分は脚部の上端が接着してた面だと想定される。外器面表面の杯部から延びた粘土とナデ調整されている部分には、粘土の接合線が明瞭に確認できる。

6の下面中央部の径26mmの円形の範囲は特に調整がされておらず、ここが簡便になった脚部内部の天井部分にあるると推測できる。

6・7は鉢形土器である。この2つの土器は6の中に7が納められた「入れ子」状態で出土したのである。6は、直立もしくはやや外反気味の口縁部を持ち、口唇部はやや平坦面を作って整形している。上胴部は、口縁よりも外側に膨らませ、下胴部に向けて窄まる。胴部は器厚が厚い。底部は平底となっており、胴部と比較して極端に器厚は薄くなる。

外器面の口縁部は指ナデ・オサエにより調整されており、指頭圧痕が顕著に残る。胴部から底部は縱方向に工具によるナデ調整痕と指ナデ調整痕を残す。底部と胴部の境界には粘土接合痕があつて、指頭圧痕が顕著に見られる。

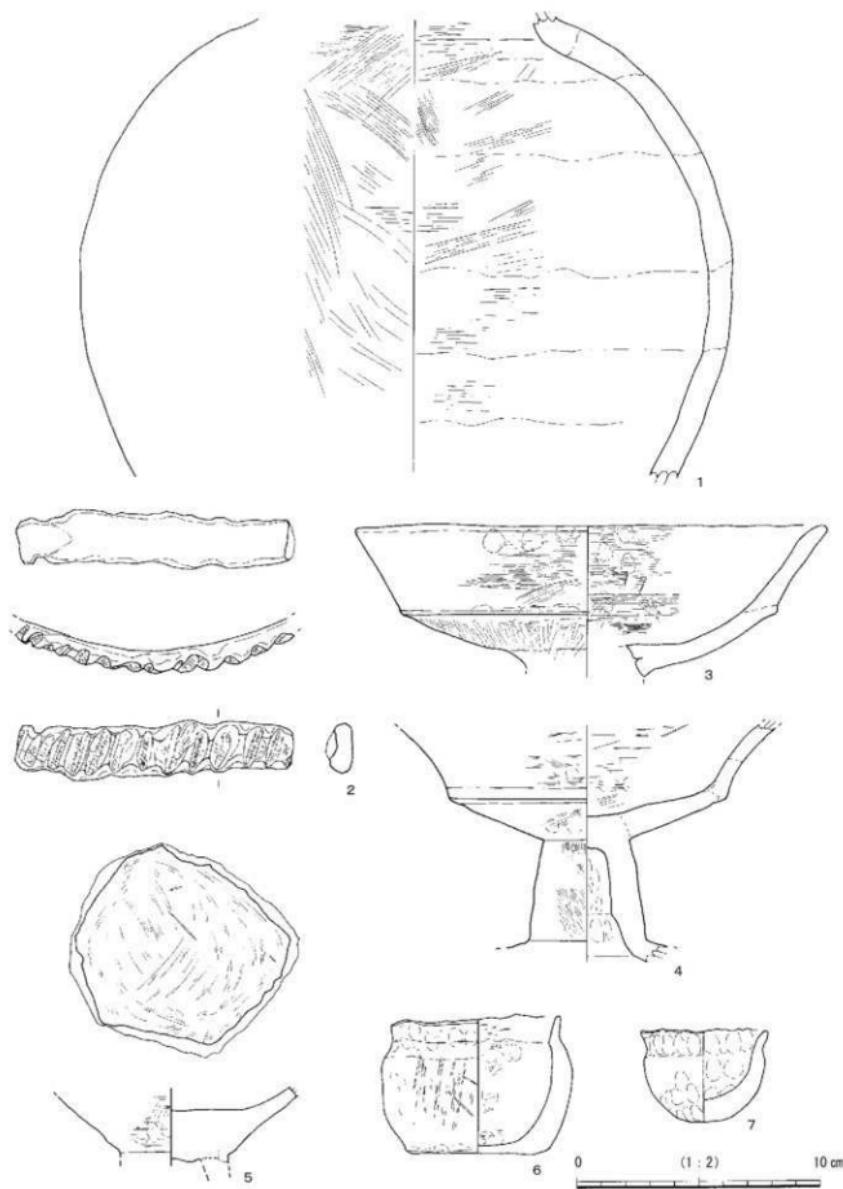
内器面の口縁部は横方向のナデ調整がされ、胴部から底部にかけては工具及び指によるナデ調整がされている。口縁部と胴部の接合部は指オサエの痕跡が顕著に残る。

7の口縁部は外向して立ち上がり、口唇は丸く整形している。胴部から底部にかけて丸く整形しており、器の大きさに対して器厚さは厚く作られている。内外器面ともに指頭圧痕が顕著に残っており、指オサエ調整後にナデ調整を施している。

(2) 石器（第9図 レイアウト番号8）

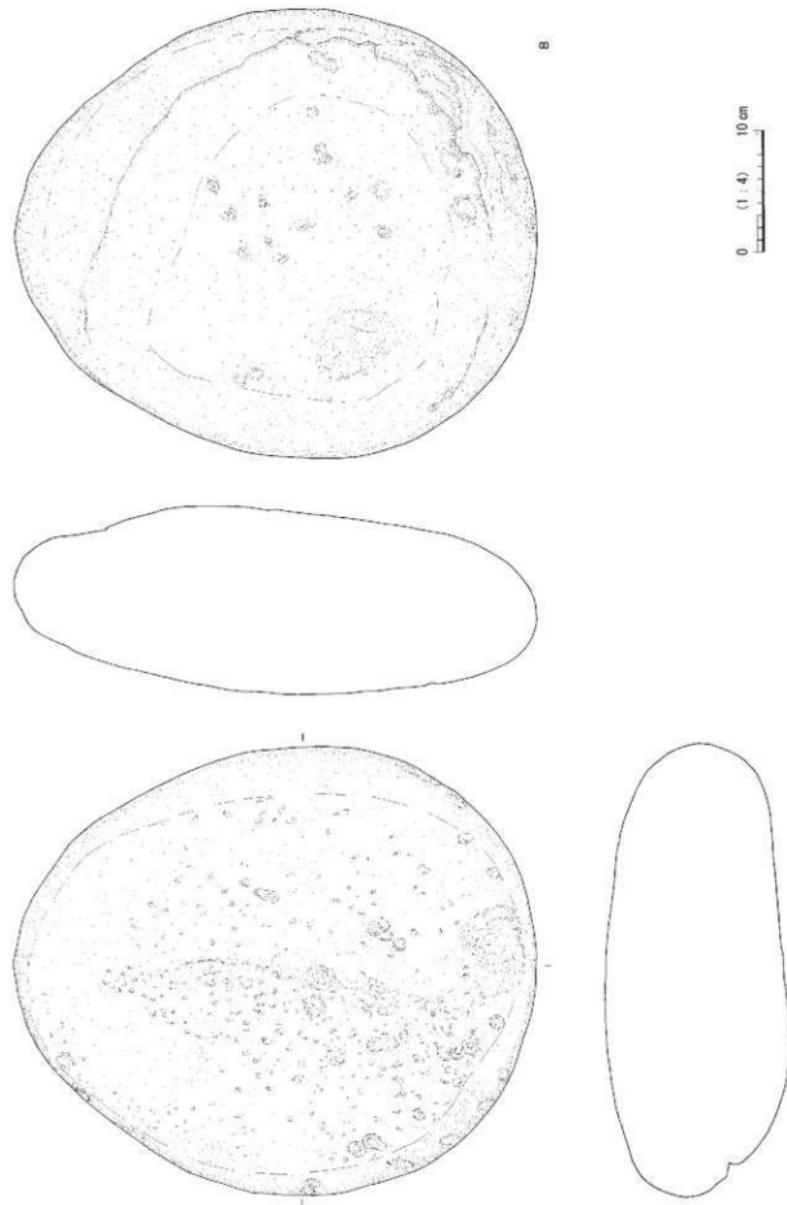
住居南西壁際床面近くで出土した大型の石器で、敲打痕を伴う砂岩の台石である。断面形状は梢円形であるが、表裏に平坦面のある石を選んで使用している。

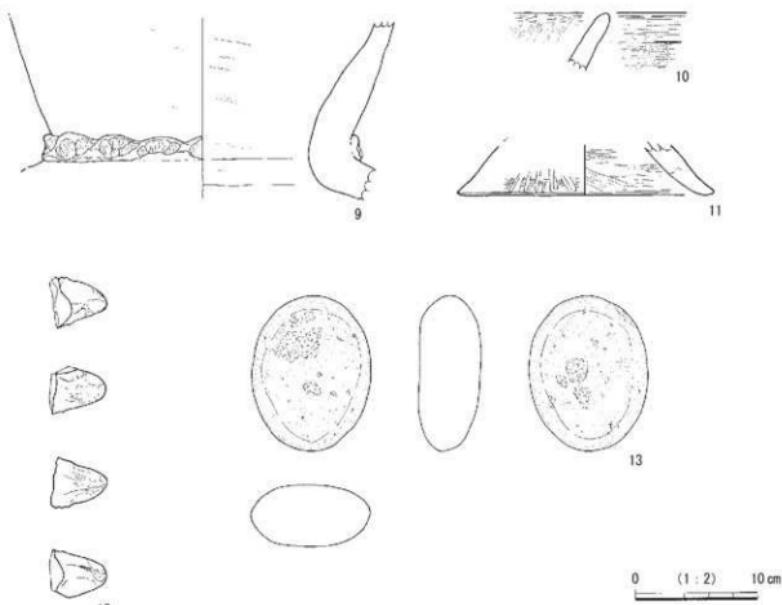
著しく凹んだ箇所は無く、長く使い込んだ印象は無いが、表側の面は平坦面全体を使用しているが、特に概ね半分に敲打痕が顕著に見られる。裏面は石の表面部分が大きく剥離しかけたようなひびが見られるが、これは自然のものと考えられる。中央部分は平坦面となっており、顕著ではないが、敲打痕が見られる。側面にも敲打痕が数箇所確認できる。



第8図 墓穴住居跡出土遺物（土器）

第9図 穩穴住居跡出土遺物（石器）





第10図 包含層出土及び周辺採取遺物

3. 包含層出土及び周辺採取遺物（第10図）

工具によるナデ調整を行っている。

(1) 土器（第10図 レイアウト番号9～11）

9は工事立会いで、堅穴住居跡近くのII層で出土した壺形土器の頸部である。くびれ部分に刻目突帯が貼り付いている。刻目は布目が確認できるが、1つ1つの刻目の形状は複雑である。ヘラ状の工具を用いているよりは、布もしくは紐を巻いた棒状のものを押し当てていている印象も受ける。内外ともにナデ調整を施す。

10は器種については不明だが、高杯の杯部の口縁と推定する。口唇を丸く整形している。外器面は横方向のナデ調整を施す。一部指頭圧痕が残る。内器面の口縁端部は横方向のナデ調整であるが、口縁端部より下は斜め方向の工具ナデ調整を施す。

11は、7T周辺の表土で採取された高杯の脚部である。脚は「ハ」の字形に広がる形状と推測される。脚端部は僅かに外反する。外器面は横方向のナデ調整を行った後、ミガキを施している。内器面は横方向にハケメ調整後に

(2) 不明遺物（第10図 レイアウト番号12）

12は欠損しているため不明である。土製品の一部とも考えられるし、単なる焼成粘土塊とも考えられる。全体的に指頭圧痕で占めており、特に意識して丁寧に整形した印象は無い。堅穴住居跡が検出される前段階のIV層で出土したものである。

(3) 石器（第10図 レイアウト番号13）

13は砂岩製の敲石である。断面形状は楕円形であるが、表側は平坦面を持つ。手に納まるサイズであり、表側の上半部の部分に敲打痕が顕著に残る。裏側も中心部分に敲打痕がある。

第2表 大園・浜牧・蓼池遺跡出土土器観察表及び石器計測表

【竪穴住居跡出土土器】

地図番号	掲載番号	取上げ年	時代	器種	部位	法量(cm)			焼成	色調			胎土			器面調整		備考
						器高	口径	底径		外 面	内 面	石英	長角石	雲母	輝石	その他	外面	内面
1	No. 6, 8, 10, 11, 12, 13, 14, 15	古墳	齒形土器	肩部～胸部	-	-	-	-	良	橙	にぶい 赤褐色	△			△	白色石	胴上部：横方 向ナデ 胴下部：縦斜 方向ナデ	内面に接合部。
2	No. 17	古墳	彎形土器 または 齒形土器	胸部突 出部	-	-	-	-	良	にぶい 黄橙	にぶい 橙	△			△	白色石	刻文突帯文	
B	No. 4, 5, 6	古墳	高坏	坏部	-	16.3	-	-	良	橙	明赤褐色	△	△		△	白色石	环口縁：指オ ナデ後横方向 のナデ 坏部：横方 向ナデ後斜 破方向の棒状 項点によるナデ	指頭圧痕後 横状工具に よる横方向 のナデ(ミ ガキ伏)
	No. 2	古墳	高坏	坏口縁 部～脚柱 部	-	-	-	-	良	にぶい 黄橙	橙	△	△		△	白色石	坏部：指頭圧 痕後ナデ 脚柱部：ミガキ 後ナデ	坏部：指頭 圧痕後ナデ 脚柱部：ミガキ 後ナデ
	No. 1	古墳	高坏	坏受部	-	-	-	-	良	橙	橙	△	△		△	白色石	指頭圧痕後ナ デ	工具による ナデ
	No. 16	古墳	鉢形土器	口縁～ 底部	5.4	6.9	5.9	-	良	橙	橙	△				白色石	口縁：指頭圧 痕後ナデ 鉢：縦方向の ナデ 底：指頭圧痕 後ナデ	口縁：横方 向のナデ 鉢底：指頭 圧痕後横 方向のナデ
	No. 16	古墳	鉢形土器	口縁～ 底部	3.8	5.2	4.8	-	良	橙	橙	△			△	白色石	指頭圧痕後ナ デ	指頭圧痕後 ナデ

【竪穴住居跡出土石器】

地図番号	掲載番号	出土地点	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(kg)	備考
9	8	住居床面	台石	砂岩	42.6	36.6	15.0	30.2	

【包含層出土及び周辺採取土器】

地図番号	掲載番号	出土位置	時代	器種	部位	法量(cm)			焼成	色調			胎土			器面調整		備考
						器高	口径	底径		外 面	内 面	石英	長角石	雲母	輝石	その他	外面	内面
9	BC-4 (住居跡 近く)	古墳	齒形土器	口縁～ 頭部	-	-	-	-	良	にぶい 橙	にぶい 褐色	○	△		△	白色石	指ナデ	指ナデ
10	一括	古墳	高坏	口縁部	-	-	-	-	良	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	○	△		△	白色石	ナデ	ナデ
11	7-T 表さい一括	古墳	高坏	脚部	-	-	-	-	良	明赤褐色	橙	△			△	白色石	横方向のハケ メ、ナデ	ナデ後ミガ キ
12	一括	不明	不明 (焼粘 土塊)	不明	-	-	-	-	良	にぶい 橙		△				白色石	指頭圧痕	ナデ

【竪穴住居跡出土石器】

地図番号	掲載番号	出土地点	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	備考
10	13	7-T 表さい一括	敲石	砂岩	6.4	4.9	2.5	120.0	

第5章 飯隈遺跡群の発掘調査の成果

第1節 層序

- 飯隈遺跡群における基本土層は以下のとおりである。
- I 層 表土。現農道の砂利など。
 - II 層 白色軽石混黒褐色土層。
 - III 層 黒質軟質土層。
 - IV 層 黄色軽石粒子混黑色土層。
 - V 層 黑色軟質土層。
 - VI 層 池田降下軽石層（I k-p）。池田カルデラを起源とする池田湖形成に伴うテフラ。約6,400年前。
 - VII 層 褐色土層。
 - VIII 層 アカホヤ火山灰層（K-Ah）。鬼界カルデラを起源とするテフラ。約7,300年前。
 - a にぶい黄褐色土層。二次堆積。
 - b 黄褐色火山灰層。
 - c にぶい黄色火山灰層。幸谷碎石流。
 - d にぶい黄褐色土層。
 - IX 層 黑褐色土層。
 - X 層 淡黄色火山灰層（Sz-S）。P-14。桜島北岳の噴火によるテフラ。約12,800年前。
 - XI 層 褐色粘質土層。

第2節 確認調査の概要（第11図）

飯隈遺跡群は飯隈古墳群域であり、さらに地下式横穴墓も過去に多く発見されていることから、トレンチ調査を行うだけでは、地下式横穴墓の有無が十分に把握できないため、確認トレンチを設定する前に事業区内の地中レーダ探査を行うことにした。

確認調査は事業区内に30箇所（1～30T）を設定し、重機でI層から少しづつ掘り下げた。トレンチ設定においては、地中レーダ探査で異常反応のあった箇所も含めた。

1. 地中レーダ探査の概要（第12～13図）

地中レーダ探査は整備前の農道の轍を利用し、第12・13図のとおりに測線を設定した。測線は40m区切りで設定し、南側の轍と北側の轍に分けて、それぞれ測線名（F1～F44）をついた。測線名の奇数番号は南側轍、偶数番号は北側轍となる。地中レーダ探査による異常信号箇所の概要是、第3表に示すとおりである。なお、異常信号箇所の距離は工事におけるセンター杭BPを0mとして、そこからの距離を示している。

なお、異常信号があった箇所のうち、烟かんパイプラインの埋設に伴う給水引込み栓などの構造物と判断できたものは、省略する。

第3表 地中レーダ探査異常信号箇所結果表

No.	異常信号箇所	測線	水平距離	深度
1	11.5 ～15.5 m	F1（南轍）	12.02～16 m	0.48 ～0.77 m
		F2（北轍）	13.2～15.4 m	0.45 ～0.59 m
2	74.8 m 556.8 ～559.5 m	F4（北轍）	74.8 m	0.80 m
		F27（南轍）	559.5 m	0.85 m
3	563.2 ～570.9 m	F28（北轍）	556.8 ～558.9 m	0.9～1 m
		F30（北轍）	563.2 ～570.9 m	0.73～1.3 m
5	813.7 m	F41（南轍）	813.7 m	0.69 m

2. 確認調査の概要（第11～13図）

① 1～10T

基本的にI～III層の堆積が厚く、地表面からVI層までの深さは1m程度である。特にI層の堆積は厚く、近代以降の農地整備による盛土の可能性が高い。

1Tは地中レーダ探査の異常信号箇所No.1に設定したが、異常信号の反応はI～III層にあたることが分かった。しかし、トレーニング中央にやや縮まる部分があったが、硬化面と言えるほどの硬度はなかった。同じく3Tも異常信号箇所No.2に設定した。異常反応はIII～IV層にあたる深さにあったが、特に異常を示すものは無かった。

結果として1～10Tには遺構・遺物は無かった。

② 11～13T

11Tの壘層で地下式横穴墓の堅坑と、農道部の陥没を確認した。トレーニングの上層は擾乱しており、恐らくIV・V層から掘り込まれた堅坑の上部が表土化したものと考えられる。地中レーダ探査では玄室の異常反応は捉えていない。なお、12・13Tでは遺構・遺物は確認されなかつた。

この区間は上層が削平されており、12Tでは表土下はV層、13Tでは表土下はV層となっている。

③ 14～19T

I～III層の堆積は厚い。特に19T周辺は最も低かった場所であったらしく、I層上部15cmは砂利・シラスで以下は85cmの厚さで造成土となっている。遺構・遺物は確認されなかつた。

④ 20～23T

20・21Tは第3表にある異常信号箇所3・4のトレーニング設定である。I層以下はシラス層上面であった。異常信号はシラス層上面における、浅黄色の砂を含む不定形プランであった。自然流路のようにも思えたが、噴砂の可能性もある。

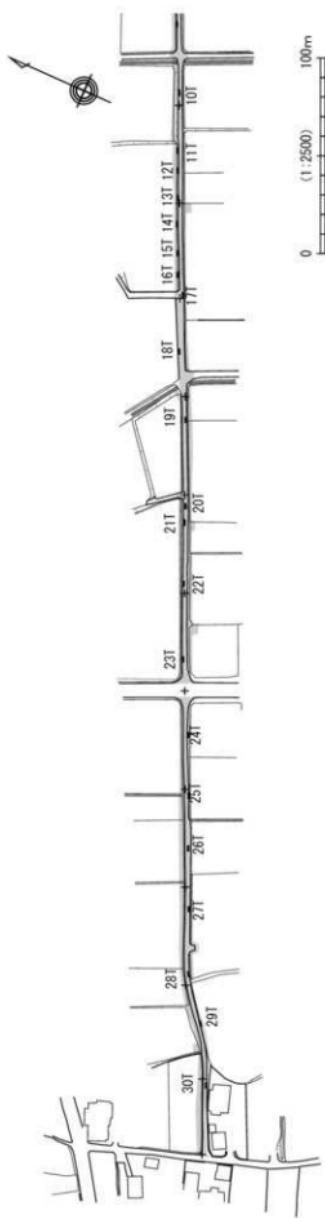
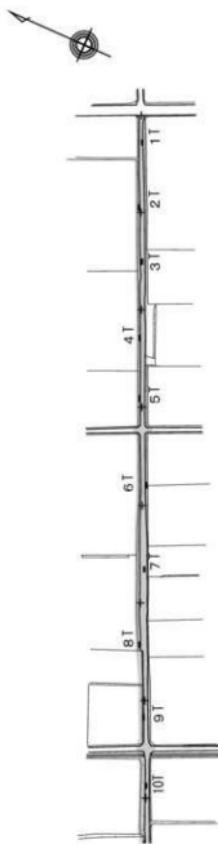
22から23Tに向けて削平の深さは浅くなる。22TはI

層下はV層で、23TになるとII層以下は残存している。
20・21T周辺が最も高い旧地形であったと推測できる。
遺構・遺物は確認されなかった。

(5) 24 ~ 30T

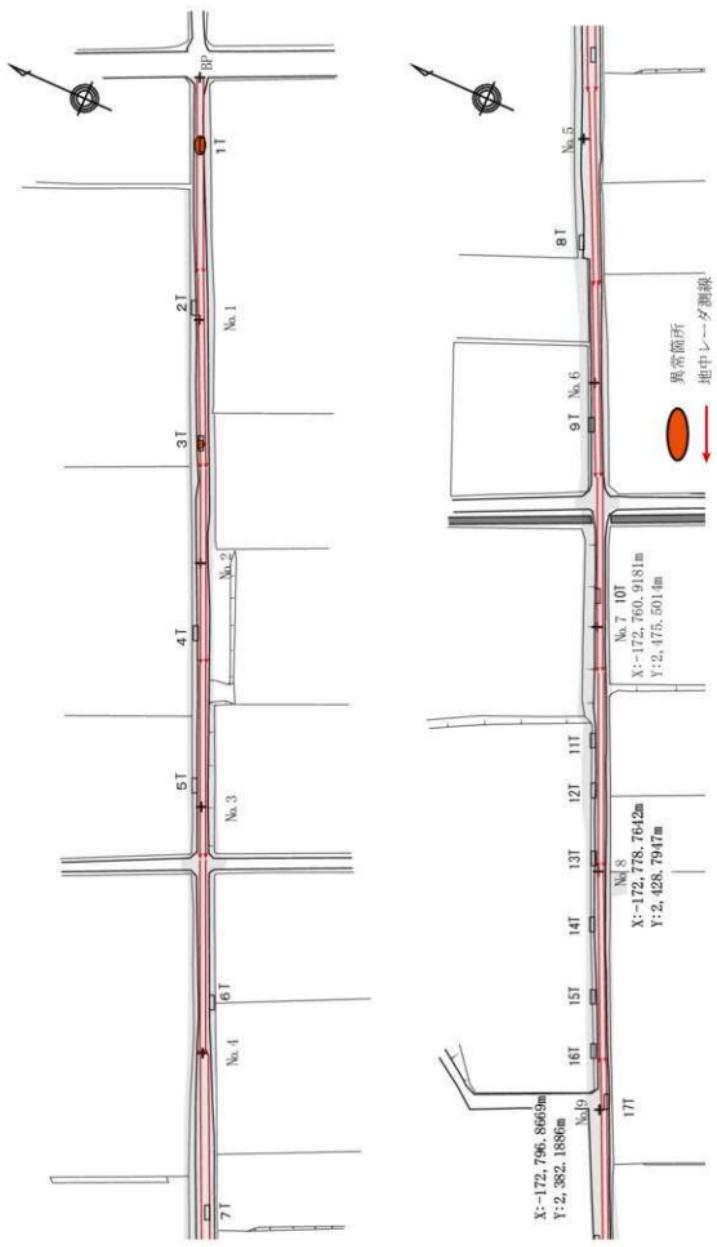
26TだけはII～V層が削平されているが、他は層序どおりに残存している。26T周辺だけは小高い旧地形だったと推測できる。

29Tは異常信号箇所No.5に設定したものである。III層上面でII層を埋土とする近代の遺構を検出した。恐らく芋類の貯蔵穴と考えられる。地中レーダ探査の異常信号はこれを捉えたものと考えられる。

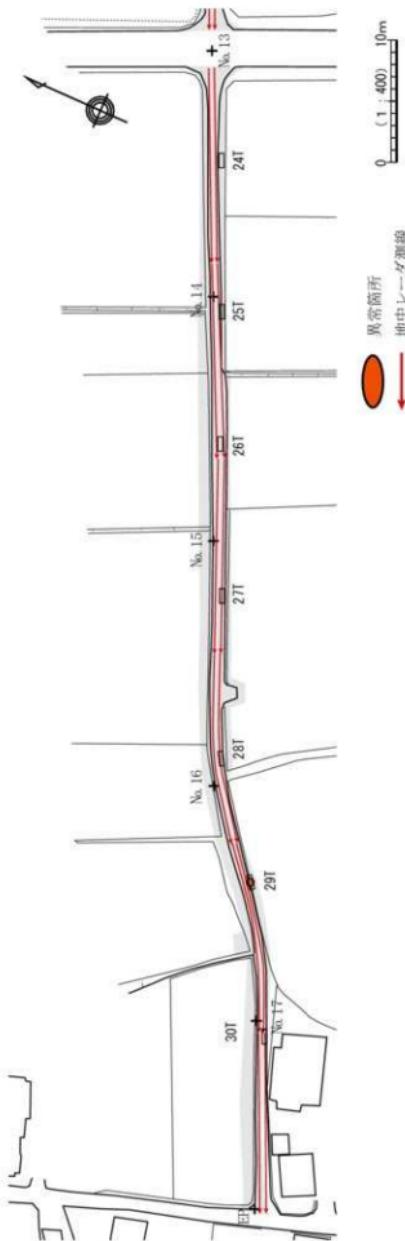
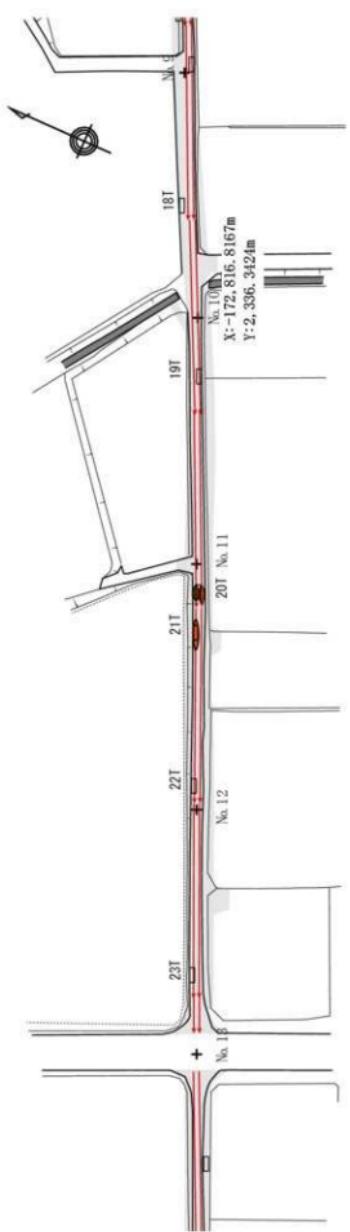


第11図 工事の範囲とトレンチ配置図

100m
(1 : 1000)



第12図 地中レーダ探査の測線と異常箇所及びトレーンチ配置図1



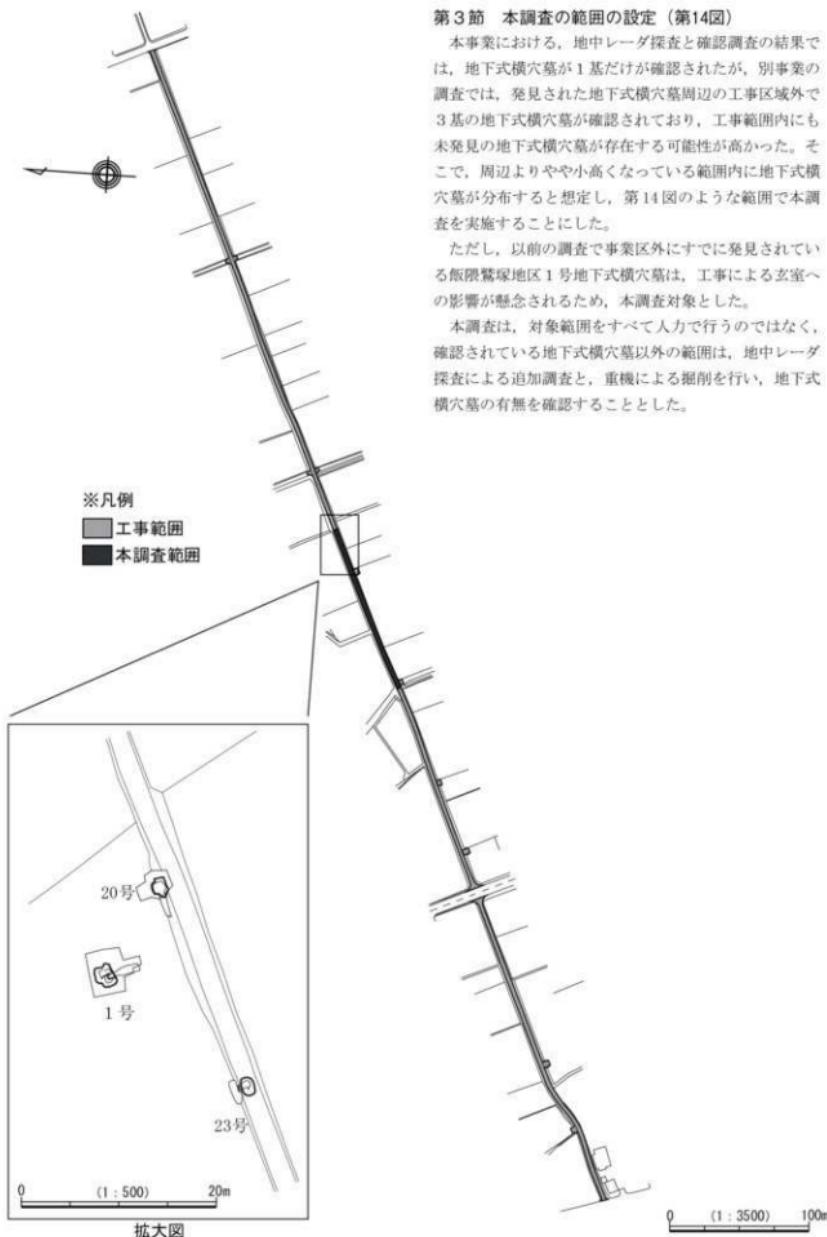
第13図 地中レーダ探査の測線と異常箇所及びトレインチ配置図2

第3節 本調査の範囲の設定（第14図）

本事業における、地中レーダ探査と確認調査の結果では、地下式横穴墓が1基だけが確認されたが、別事業の調査では、発見された地下式横穴墓周辺の工事区域外で3基の地下式横穴墓が確認されており、工事範囲内にも未発見の地下式横穴墓が存在する可能性が高かった。そこで、周辺よりやや小高くなっている範囲内に地下式横穴墓が分布すると想定し、第14図のような範囲で本調査を実施することにした。

ただし、以前の調査で事業区外にすでに発見されている飯隈鶯塚地区1号地下式横穴墓は、工事による玄室への影響が懸念されるため、本調査対象とした。

本調査は、対象範囲をすべて人力で行うのではなく、確認されている地下式横穴墓以外の範囲は、地中レーダ探査による追加調査と、重機による掘削を行い、地下式横穴墓の有無を確認することとした。



第14図 飯隈遺跡群工事と本調査の範囲及び遺構配置図

第4節 遺構の概要

本发掘調査では、記録保存のため地下式横穴墓3基の発掘調査を実施した。いずれも副葬品に鉄製品を伴う共通点があるが、墓の規格は様々で、人骨の残存状況も不揃いであった。詳細については以下のとおりである。

1. 1号地下式横穴墓（第15～18図）

1号地下式横穴墓の堅坑は、IV層で検出された。全長は4.72mである。堅坑の規格は、玄室に対して横幅2.12m×縱幅1.51mであった。そのため、堅坑は玄室に対して横長を呈する形で確認された。なお、堅坑の深さは、検出面から最深部まで2.1mである。

堅坑の埋土は、第15図のとおり計11層に分層される。うち6層と9層に大きな画期がみられ、6層より上層の堆積がややしまりが弱く、色調では6層より上層が9層以下の埋土より暗い傾向がみられた。また、玄室の閉塞状況については、狭道に目立った土塊がなく石材も置かれた様子もなかったため、木材を用いた板閉塞と思われる。堅穴から狭道に向かっての堆積では、閉塞していた板材が朽ちたのち玄室に向かって埋土が流れている様子がみられ、6層上面では一部掘りこまれた痕跡が見受けられる。仮に追葬があったとすれば、9層より上層が追葬後の埋土と考えられる。

玄室構造は、妻入りで玄門からの奥行が2.45m、玄室の最大幅は1.08mとなり、天井高は約0.6mを有する。狭門はやや狭く床面幅0.36mで天井高は0.83mであった。

玄室天井の形状は扁平状をなしており、狭道は極く約50cmで、玄門から玄室にいたる通路は確認できず、玄門からすぐに玄室が造成されている様相であった。

遺構の残存状況は、玄室天井全体が沈み、かつ玄室奥側天井が剥落している状況であった。玄門側天井は平成22・23年度の確認調査で一部陥没している。狭門は、左側壁が調査中に剥落したものの、天井面にも加工痕がみられるなど残存状況は良好であった。

加工痕は、堅坑・玄室とともに明瞭に観察することができた。堅坑は約4cm幅の工具を垂直に削っている痕跡が多くみられたが、狭門周辺は左斜め下に向かって削られており工具の幅もやや広い約6cmの痕跡がみとめられた。玄室内は、奥壁に向かって削っている痕跡が多くみられ、工具の幅は約7cmであった。

人骨は、大腿骨が2点出土し、頭骨周辺にまとまつた骨片が確認された。また、遺体は足から玄室内に安置されていたため、玄門側に頭骨、玄室奥壁側に大腿骨がみられた。副葬品については、刀子が1点出土した。刀子は右腕あたりから出土したため、遺体に装着させた可能性は低く、遺体と一緒に安置したものと思われる。

2. 1号地下式横穴墓出土遺物（第19図）

(1) 鉄製品（第19図 レイアウト番号14）

14の残存状況は良好で、種別は刀子となる。規格は最大長12.2cm・最大幅1.6cm・最大厚0.6cm・重さ24.5gである。刃部は片刃で刃先がやや銳利になっていて、刃闇はナデ型を呈する。茎の部分は孔が穿かれている。刃身の片面サビには、布で巻いた痕跡が明瞭に観察できる。恐らく、刀子を布で巻いた後、右脇側に置かれたものと想像される。

3. 20号地下式横穴墓（第20～24図）

20号地下式横穴墓の堅坑は、IV層で検出され、全長は4.02mである。堅坑の規格は、玄室に対して横幅1.5×縱幅2.3mであった。また、堅坑の形状は玄室に対して略正方形を呈する形で確認された。なお、堅坑の深さは、検出面から最深部まで1.26mである。

堅坑の埋土は、第20図のとおり計10層に分層される。色調は全体的に暗く3層の層厚が他の層より厚い状況であった。狭門の閉塞状況は、狭道に目立った土塊がなく石材を置いた様子も無かったため、木材を用いた板閉塞と思われる。

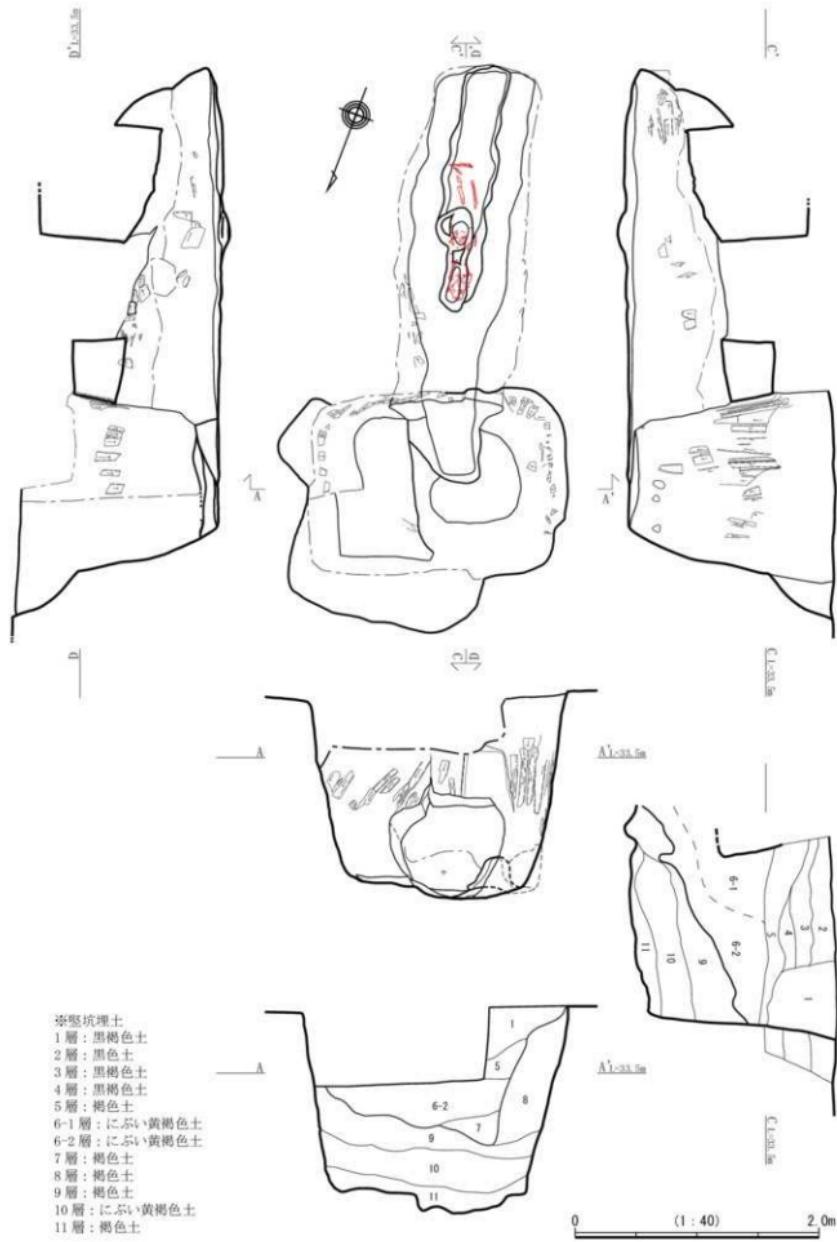
玄室構造は、妻入りである。玄門からの奥行が2.3mで、玄室の最大幅は1.0mとなり、天井高は0.6mを有する。狭門はやや狭く床面幅0.56mで天井高は0.86mであった。

玄室天井の形状は扁平状をなしており、狭道は短く約50cmで、玄門から玄室にいたる通路は確認できず、玄門からすぐに玄室が造成されている様相であった。

遺構の残存状況は、堅坑上面が削平されているものの良好で、加工痕も顕著にみられる。

加工痕は、堅坑・玄室ともに明瞭に観察することができた。堅坑は約5cm幅の工具を左斜め下に向かって削っている様子が観察でき、最後の壁を削る段階では右利きの人物が掘っていたと思われる。玄室内は、狭門から奥壁に向かって掘り進めている痕跡が認められ、工具は5～6cm幅の規格であったと思われる。玄室天井にも同様の加工痕がみられた。

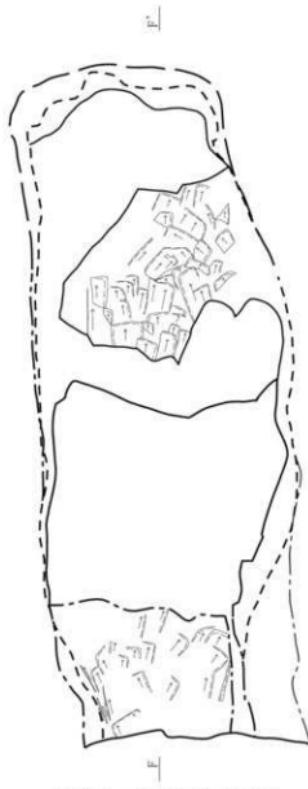
人骨は残存が良好なものは出土せず、骨粉となって玄室内から検出された。遺体のおおよその安置場所はわからず、それ以外の情報の入手は困難であった。副葬品は刀子と貝製品が左腕周辺から出土した。貝製品は貝釧で、割れていたりするものの、おおよそ2個体のものが出土した。出土位置から、遺体の左手首に貝釧を装着させたまま玄室内に安置したと思われる。なお、貝釧の素材となる貝の種類はオオツタノハと呼ばれ、種子島・屋久島以南に生息している。



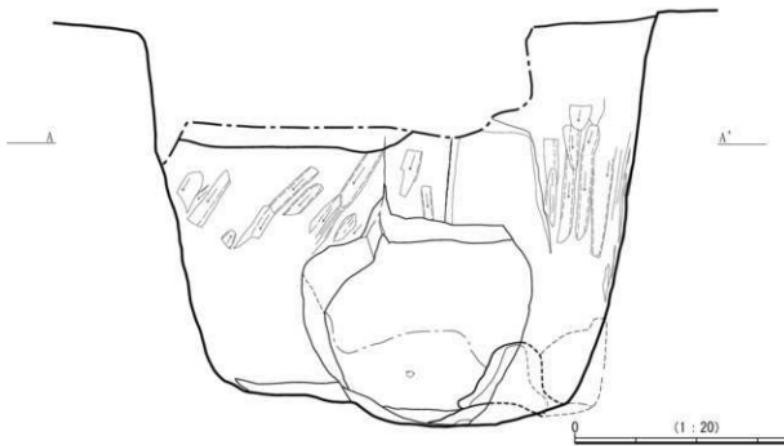
第15図 1号地下式横穴墓実測圖展開図



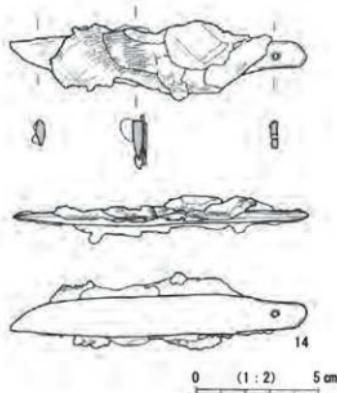
第16図 1号人骨及び遺物出土状況図



第17図 1号玄室天井部平面図



第18図 1号玄門断面見通し図



第19図 1号出土遺物

4. 20号地下式横穴墓出土遺物（第25・26図）

(1) 鉄製品（第25図 レイアウト番号15）

15は、茎の部分が折れているが残存自体は良好で、種別は刀子である。刀子の規格は、最大長8.2cm、最大幅1.3cm、最大厚0.5cm、重さ10.0gである。刃部は片刃で刃先がやや鋭利になっている、刃闌はナデ型を呈する。穿孔はなくわざかに茎部から木片、刀身の片面サビから布目が観察できる。1号出土刀子同様、布で巻かれたり後、左腕側に置かれたものと思われる。

(2) 貝製品（第26図 レイアウト番号16・17）

20号地下式横穴墓から出土した貝製品は、オオツタノハ製貝鉤で、割れているものも含めて5点出土し、内残存が良好な16・17を図化した。16は6割程度残存し、縁端部は所々欠けている。色調は、灰白色を呈する。やや摩耗している状態で、加工は丁寧な研磨が施されていた。17は4割程度残存し、縁端部は欠けているところが多くみられた。灰白色を呈し、摩耗も多くみられた。

5. 23号地下式横穴墓（第27～29図）

23号地下式横穴墓の堅坑は、IV層で検出された。全長は2.45mである。堅坑の規格は、玄室に対して横軸1.9×縦軸1.2mであった。また、堅坑の形状は玄室に対してやや横長を呈する形で確認された。なお、堅坑の深さは、検出面から最深部まで1.5mである。

堅坑の埋土は、第27図のとおり計9層に分層される。色調は大きく2分割でき、1層から5層までやや暗く、6層から9層はやや灰色を帯びる様相であった。おそらく、堅坑をシラス面まで掘り下げたため、掘り下げたシラスが混じり灰色を帯びたと思われる。窓門の閉塞状況

は、土塊ブロックが6層より上面で検出されたため、土塊閉塞と思われたが、窓門天井部がほぼ焼れており、6層上面の土塊ブロックは窓門天井部とみられる。そのため、1号及び20号同様、23号の閉塞は木材を用いた板閉塞と思われる。

玄室構造は、平入りで玄門からの奥行が1.25m、玄室の最大幅は0.91mとなり、天井高は0.68mを有する。窓門はやや狭く床面幅0.53mであったが、窓門天井部の崩落が激しく天井高の計測は困難であった。

玄室天井の形状はドーム状をなしており、人骨の頭上の天井は高く、足元に向て天井が低くなっている様相であった。

遺構の残存状況は、堅坑及び窓門・玄門・窓道は、烟からの埋設工事による搅乱をうけ、半壊している状況であった。玄室内の壁は剥離している様子ではなく、加工痕が良好に残存している様相であった。

加工痕は、搅乱の影響を受けていない堅坑の一部や玄室内は明瞭に観察することができた。堅坑は、幅約6cmの工具で縦方向に削っている様子であった。玄室内は足元に工具痕が顕著に残っており、足元に向かって掘り進めていく方向を観察することができた。なお、玄室内の工具痕は壁や天井を整形しながら掘り進めた様子ではなく、ただ単純に遺体を入れる空間を用意するために掘ったようにもみえた。

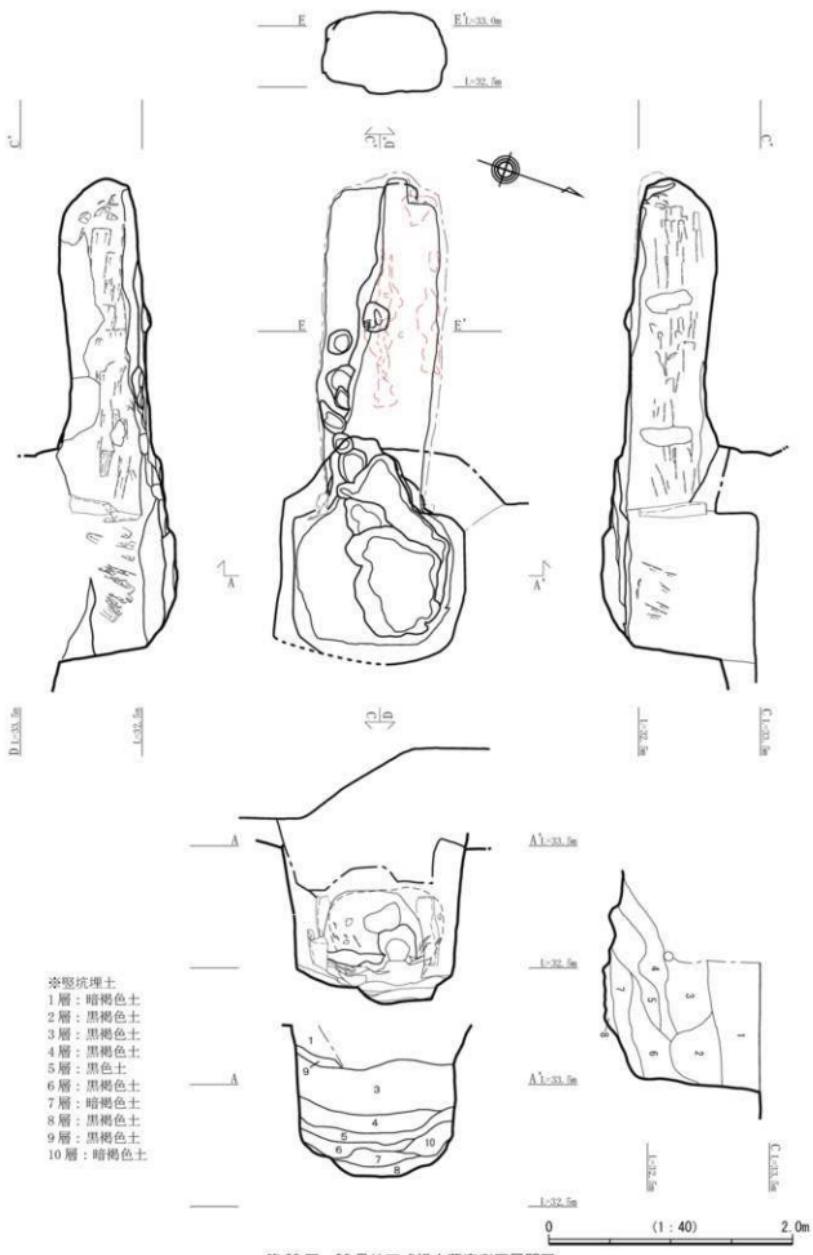
6. 23号地下式横穴墓出土遺物（第30図）

(1) 鉄製品（第30図 レイアウト番号18～22）

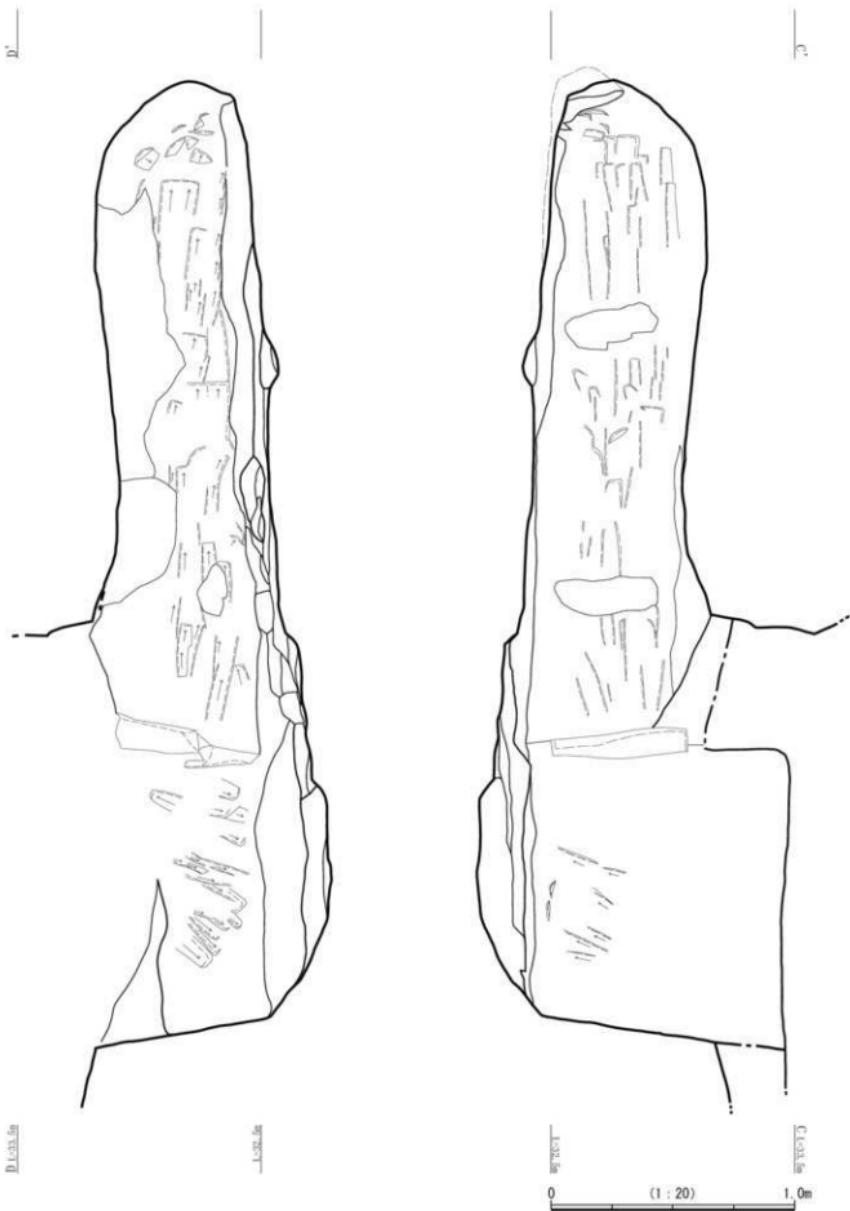
18の残存状況は良好で、種別は刀子となる。刀子の規格は最大長8.0cm、最大幅1.0cm、最大厚0.4cm、重さ11.0gである。刃部は片刃で刃先がやや鋭利になってしまい、刃闌はナデ型を呈する。柄の部分には穿孔はないものの、茎部に木皮が巻かれている様子が観察できる。また、刀身の両面サビから僅かに布目が観察できる。20号は1号と違い、左腕側に据え置かれた状態で出土した。

19の種別は鉄鏃で、茎の部分が折れているが残存自体は良好である。鉄鏃の規格は最大長15.5cm、最大幅3.9cm、最大厚0.5cm、重さ59.5gである。鏃身部から茎部にかけて変化がなくほぼ直線であり、刃部が三角の形状をしているため、大型の圭頭鏃に分類される。また、遺物全体にサビが多く付着しているため、茎部から有機物の痕跡は確認されなかった。なお、鉄鏃の出土地点は、被葬者右側に置かれた鉄刀と玄室壁の間に据え置かれていた。

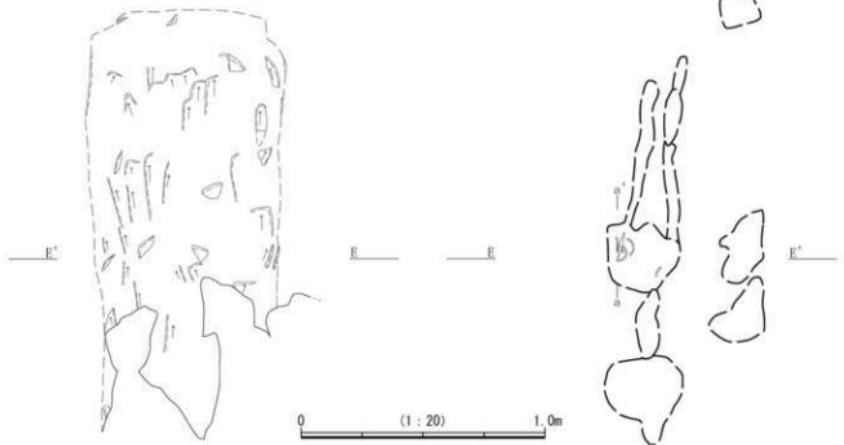
異形鉄器20は、足部が一部欠損し出土している。規格は、最大長14.2cm、最大幅2.3cm、最大厚0.5cm、重さ42.5gである。身部から足部にかけてやや直線を呈するも、足部から緩やかに外開きとなる。足部中央には、根拠するための目釘孔や木皮が一部観察できる。また、



第20図 20号地下式横穴墓実測図展開図

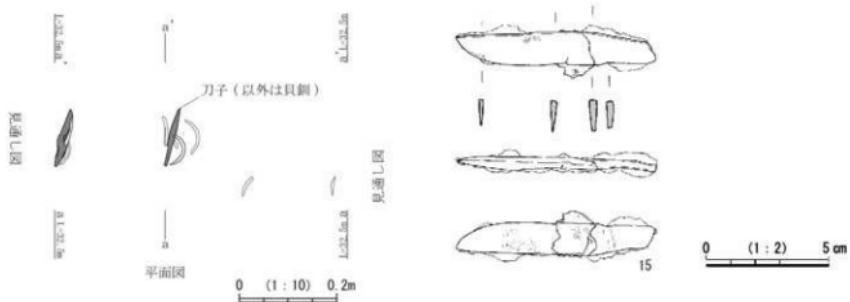


第21図 20号縦断見通し断面図



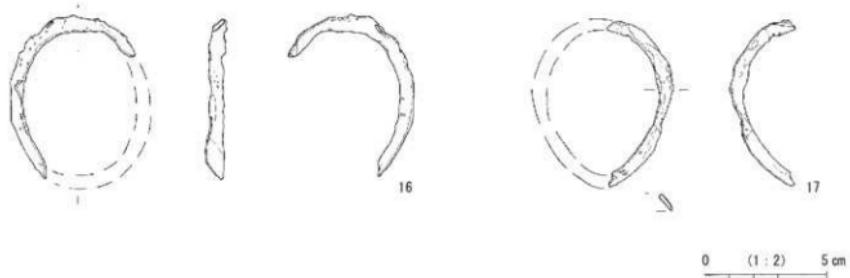
第22図 20号天井部工具痕実測図

第23図 20号骨及び遺物出土状況図



第24図 20号遺物出土状況詳細図

第25図 20号出土遺物



第26図 20号出土遺物

身部では、わずかに布目がみられるため、異形鉄器も埋葬時に布で覆われていた可能性がある。なお、出土地点は被葬者頭部右上で、鉄剣の茎部の下に潜るように置かれていた。

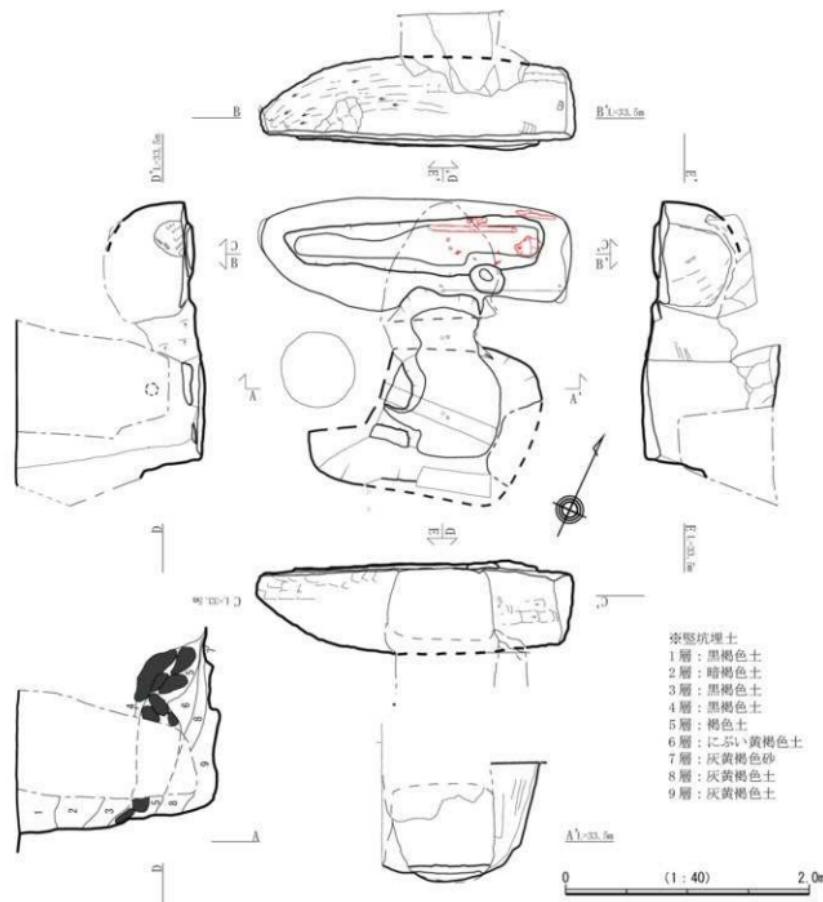
鉄刀21は玄室奥、被葬者右手側に配置されていた。全長72.6cmである。刀部の長さ58.6cm、茎部の長さ14cmを計る。関部の所に付着する木質の刃部側が刀身に直行する方向に一直線に整えられていることや、鞘の一部と考えられる木質の有機物の茎部側端部が刀身に直行する方向に一直線に整えられていることから、ここに

鞘口があったと言える。

茎部に2箇所の目釘孔が確認できる。茎部の幅は関部付近で2.7cm、茎尻で1.5cmである。刃部における棟側の茎部の側面は厚さ8mmで、一方刃先側の茎部側面は厚さ3mmである。断面形状は台形を呈している。

刃部はやや刃先側に反っている。幅は関部に向けて大きくなっているおり、関部で2.7cmを計る。棟の幅は1cmである。刃闊はナデ間である。

刃部の片面には、先端部分と関部周辺に木質が残存する。先述したように鞘の一部と考えられる。残存する鞘



第27図 23号地下式横穴墓実測図展開図

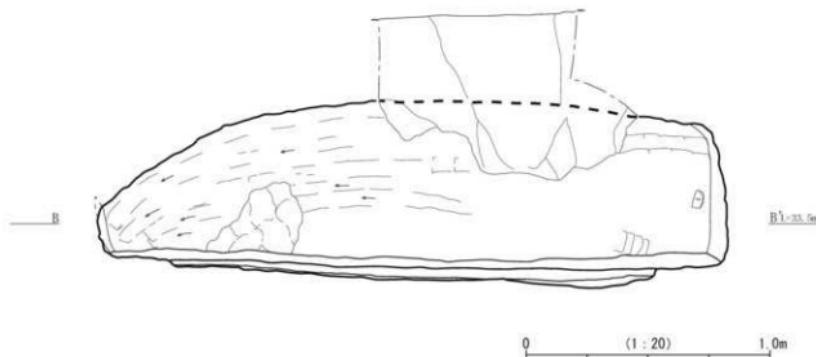
の断面形状は半月状で、先端部分に関しては鞘の内部側を、刀身が納められるよう刺り貫いているのが確認できる。平坦面を刀身が納まるように平坦面を刺り貫いた断面半月状の木材を2つ合わせて鞘を形成していると思われる。完全な鞘の断面形状は刃先部が窄まる卵型と推測する。

わずかであるが、鞘の外面に繊維質と思われる有機物が付着している。

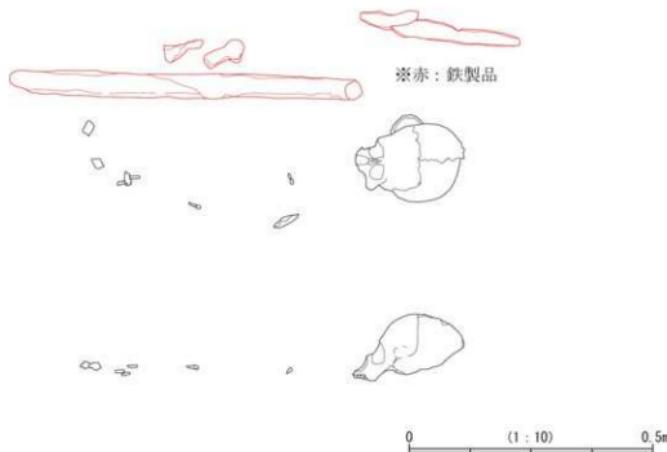
鉄剣22は被葬者頭部から右側の玄室奥端に配置されていた鉄剣で、20の異形鉄器の直上で出土した。刀身全長29.4cmである。剣身部の長さ22cm、茎部の長さ

7.4cmを計る。関部の所にある鏽ぶくれの刀部側端部が、刀身に直行する方向に一直線に生じているところや、もう片面には柄装具の一部と思われる木質が残存する部分とそうでないところの境目が、剣身に対して直行する方向に一直線に別れるところから、柄装具口がこの部分にあったと推測できる。

茎は茎尻に向けて急速に窄まり、平面形は逆三関係を呈する。茎部幅は関部で3.3cm、茎尻での厚さはX線写真からの推定0.7cmとなる。厚さは鏽ぶくれや有機物の付着のため、正確には不明であるが、8mm程度であろう。剣身の中心軸に対して茎部の中心軸はやや傾いている。



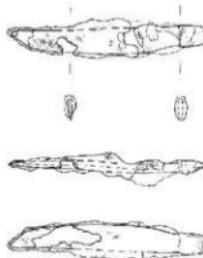
第28図 23号玄室横断見通し断面図



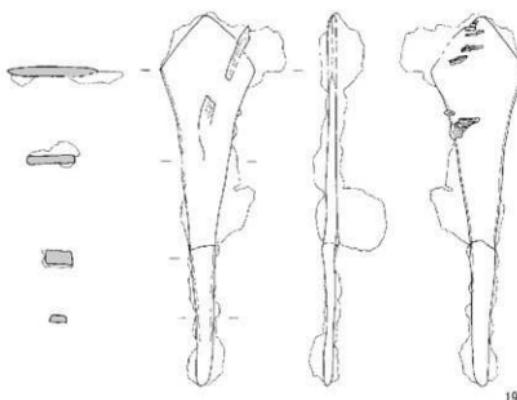
第29図 23号人骨及び遺物出土状況図

そのため、刃間は左右非対称である。なお、両刀とも撫
闇である。茎部の中央に目釘孔が確認できる。

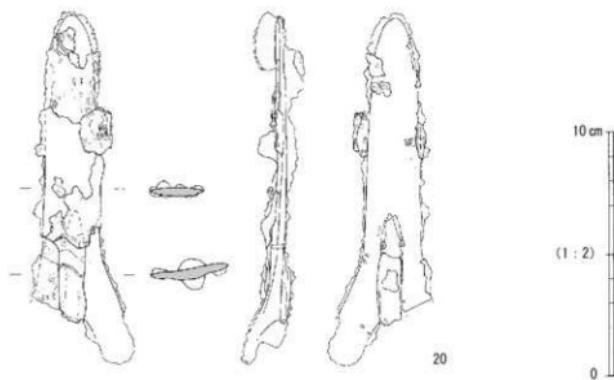
剣身部に向けて緩やかに広がっており、関部のところ
で幅3.5cmである。特に鎬は確認されない。断面形状は
レンズ状を呈する。関部が最も厚く、厚さ8mmである。



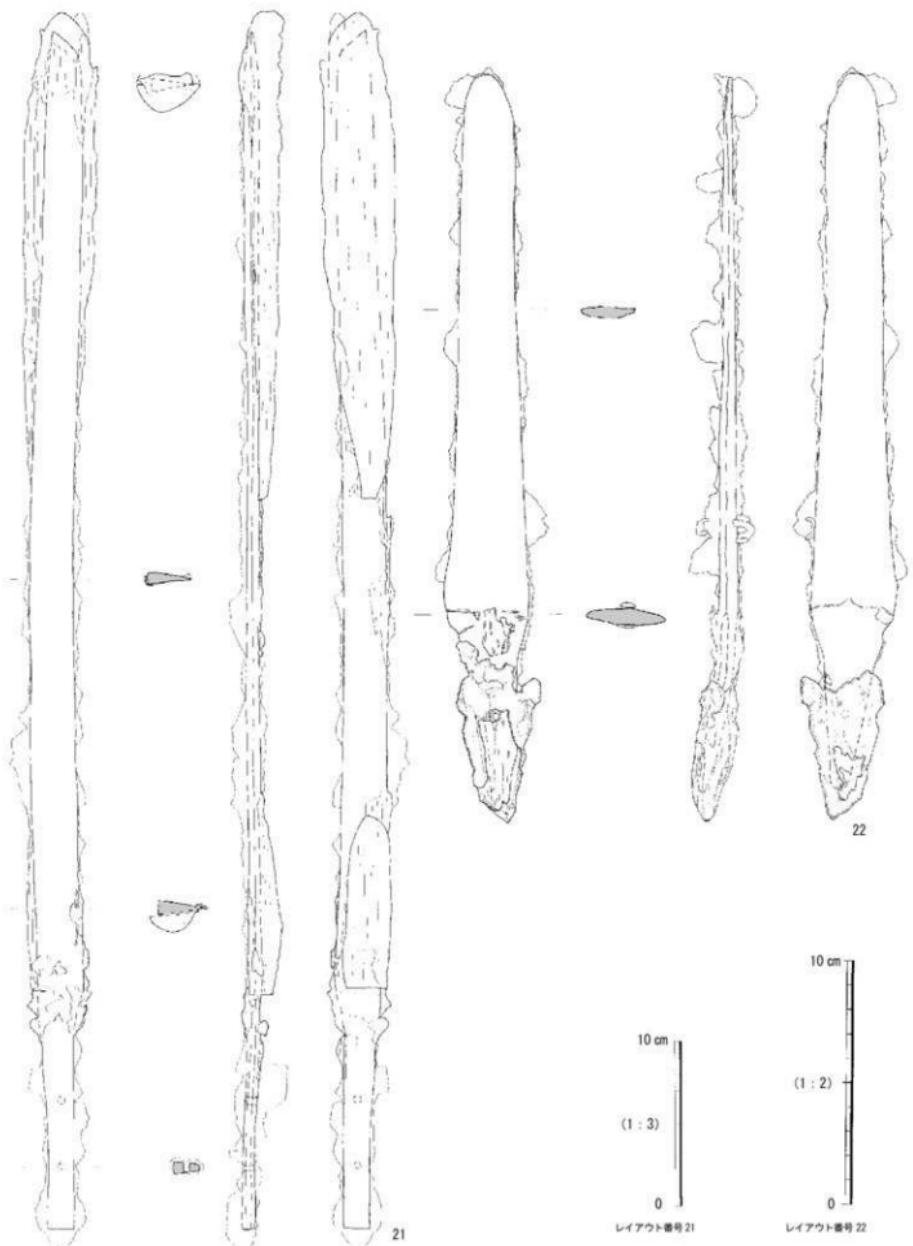
18



19



第30図 23号出土遺物1



第31図 23号出土遺物2

第4表 施設遺跡地下式櫛六竈出土遺物計測表 () 内の数値は推定

種類	掘出番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	特徴
19	14	1号玄室 人骨右手側	刀子	12.2 刃部 基部 2.0	10.2 刃部 基部 2.0	1.6	0.6	24.5 刃部に巻きつけた筋が残る。基部に穿孔あり。
25	15	20号玄室 人骨左手側	刀子	8.2 刃部 基部 2.2	6.0 刃部 基部 2.2	1.3	0.5	10.0 刃部に筋が残る。基部は断状の樹皮が残る。
18		23号玄室 人骨右腕側	刀子	8.0 刃部 基部 2.8	5.2 刃部 基部 2.8	1.0	0.4	11.0 刃部にわずかに布痕が残る。基部は断状の樹皮が残る。
30	19	23号玄室 人骨右腕側	鉄劍	15.5 刃部 基部 4.0	2.5 刃部 基部 4.0	7.3 刃部 基部 4.0	0.5 刃部 基部 0.6	59.5 刃部に木片が残る。 10.0 刃部にわずかに木片が残る。
20		23号玄室 人骨右腕側	異形鉄器	(14.2) 身部 (6.2)	9.0 身部 (6.2)	2.3 身部 足部 1.5	0.5 足部 0.6	42.5 身部にわずかに布目あり。 5.5 足部に布目あり。
21		23号玄室 人骨右腕側	鉄刀	72.6 刃身部 基部 14.0	58.6 刃身部 基部 14.0	2.7 刃身部 基部 2.0	0.8 刃身部 基部 0.3	736.5 刃の一部である木質が残る。目釘孔2箇所。
31	22	23号玄室 人骨頭部右側	鉄劍	29.4 刃部 基部 7.4	22.0 刃部 基部 7.4	3.5 刃部 基部 3.3	0.7 刃部 基部 (0.8)	151.0 基部に木質が残る。目釘孔1箇所。

種類	掘出番号	出土位置	器種	直種	内径(cm)	外径(cm)	重さ(g)	特徴
16		1号玄室人骨左手側	貝剣	オオツタノハ	長径 短径 (5.9) (4.6)	長径 短径 (7.0) (5.6)	2.36	約5分の3現存している。
26	17	20号玄室人骨左手側	貝剣	オオツタノハ	長径 短径 (6.0) (4.5)	長径 短径 (7.0) (5.8)	2.65	約2分の1現存している。

第6章 総括

第1節 大園・浜牧・蓼池遺跡発掘調査のまとめ

工事区域内における確認調査と工事立会いを通じて、ほとんど包含層の中に遺物が確認されない中、1軒だけ堅穴住居跡が検出された。工事区域外に未発見の遺構が包蔵している可能性はある。特に堅穴住居跡が発見された箇所近くのビニールハウス周辺では遺物の散布が顕著である。ただし、ビニールハウスに近い9~11Tでも遺構・遺物が確認されていないため、極めて小さな範囲で集落が形成されている印象も受けた。

住居跡南西壁面にのみ流れ込むように土器が出土しているのは調査中に気にかけていたが、第4章でも述べたように、住居跡南西側に盛り上げていた土が廢絶後に流れむと同時に、盛土にセットしていた土器も流れ込んだ印象を受けた。ただし、埋め土の所々に散らばる炭化物について、今後詳細に調査を行う必要がある。

大型の石器はほぼ床面に置かれていたので、住居使用段階で持ち込まれたものと思われるが、蔽打痕は認められるものの、あまり使い込んだ印象はない。

堅穴住居跡内から出土した遺物から判断すると、古墳時代後半期に相当する。後述する飯隈遺跡群の地下式横穴墓の時期からすると、新しい時期のものであるが、古墳築造時期の集落の位置を推し量るうえでは、貴重な資料と言えるだろう。飯隈古墳群、あるいは飯隈地下式横穴墓群を築造していた人々の集落が大園・浜牧・蓼池遺跡内に存在する可能性もある。

第2節 飯隈遺跡群発掘調査のまとめ

平成27年度に、農道整備事業によって地下式横穴墓が陥没する恐れがあったため、記録保存のための発掘調査を実施した。飯隈遺跡群内にある地下式横穴墓の発掘調査を実施するのは、昭和初期の圃場整備時以来で、軽石製石棺が出土する可能性も視野に入れつつ本調査を行った。本事業で発掘調査を実施した地下式横穴墓の基

数は、計3基（1号・20号・23号）になり、調査結果は以下の第5表のとおりである。

今回の調査で特筆すべき点として、①玄室の構造について、妻入りと平入りが共存する。②オオツタノハ製貝釧を装着した人物が埋葬されていた。③女性の埋葬に、武器が副葬品として納められていたことが挙げられる。人骨については、23号のように密閉空間を保つことができれば良好に残存することも挙げておきたい。

まず、オオツタノハ製貝釧の出土は、大隅半島での出土例は初で、飯隈遺跡群に限る人物たちが交易性の強い集団であったことが伺える。また、女性の副葬品が武器である点も大隅半島の出土例では立小野塚遺跡以来2例目となる。これも、飯隈遺跡群の地下式横穴墓埋葬者が周辺地域との関連性を比較するうえで貴重な資料といえる。

このように、わずか3基の発掘調査であったが、今まで不確かであった飯隈遺跡群の地下式横穴墓埋葬者の様相が垣間見れた調査内容であったと思う。今後も周辺地域の地下式横穴墓の調査例を注視しながら、飯隈遺跡群の地下式横穴墓を解明していきたいと考える。

第5表 地下式横穴墓調査結果表

番号	玄室構造	玄室内		性別
		副葬品	人骨	
1号	妻入り 偏平型	刀子：1点	有り。	女性
20号	妻入り 偏平型	刀子：1点 貝釧：2点	無し（ただし、全身が粉状に検出）。	
23号	平入り 家型	刀子：1点 鐵鏟：1点 鐵劍：1点 鉄刀：1点	有り。	女性

図 版



①竪穴住居跡検出状況 ②竪穴住居跡埋土堆積状況 ③床面検出状況及び遺物出土状況 ④東調査区壁面の埋土状況
⑤西側壁面下の壁帶溝 ⑥完掘状況



堅穴住居跡出土遺物・包含層出土遺物



4



3

堅穴住居跡出土遺物（高杯）

堅穴住居跡出土遺物（高杯）



8

堅穴住居跡内出土遺物（台石）



6

7

堅穴住居跡内出土遺物（鉢形土器）



① 1号完掘状況
② 1号竪穴土層断面
③ 1号人骨出土状況



④ 20号完掘状況
⑤ 20号玄室完掘状況
⑥ 20号玄室右壁工具痕



① 23号竪穴土層断面
② 23号玄室左壁完掘状況
③ 23号玄室右壁完掘状況
④ 23号玄室右奥壁工具痕

⑤ 23号人骨及び鉄製品出土状況左壁より
⑥ 23号人骨及び鉄製品出土状況羨門より
⑦ 23号頭骨・鉄刀・鉄鎌出土状況
⑧ 23号頭骨接写



1号, 20号, 23号 地下式横穴墓出土鉄製品



14



14



15



19

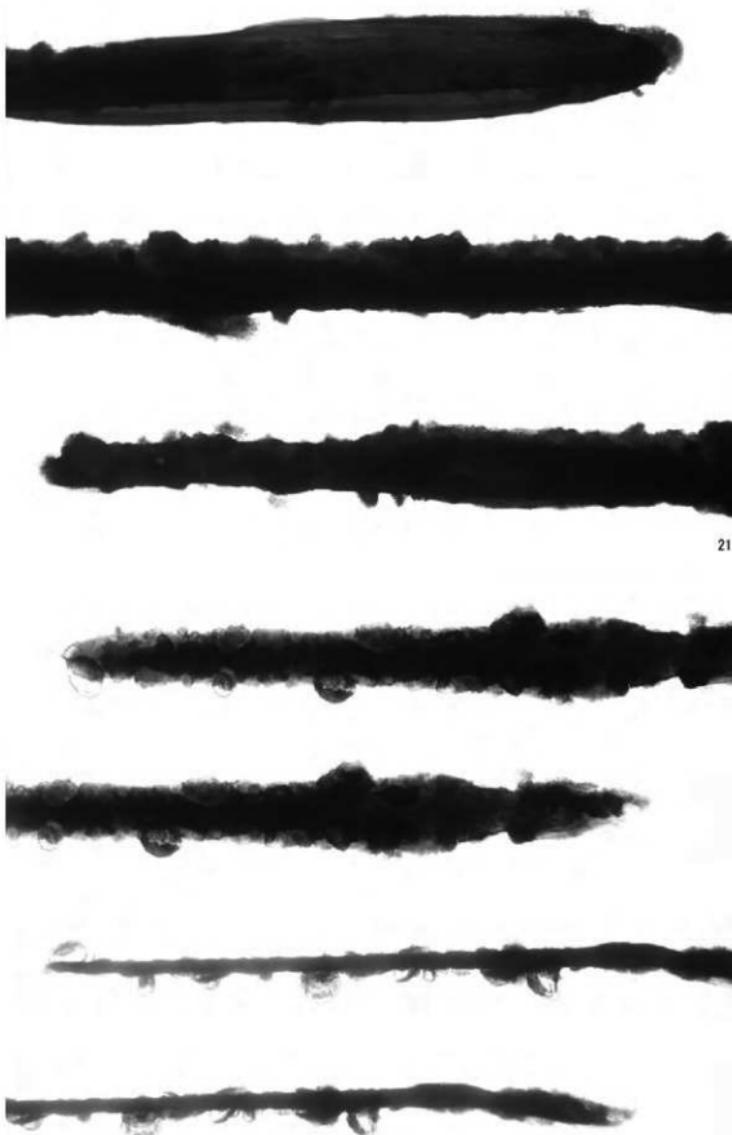


18



20

1号、20号、23号 地下式横穴墓出土鉄製品X線写真



21

22

23号 地下式横穴墓出土鉄製品X線写真



① 20号地下式横穴墓出土貝製品



② 23号地下式横穴墓出土頭骨

大崎町教育委員会発掘調査報告書(0)

県営畠地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財報告書

大園・浜牧・蓼池遺跡 飯隈遺跡群

2018年3月

発行 大崎町教育委員会

〒 899-7305 鹿児島県曾於郡大崎町假宿 1029 番地

印 刷 株式会社 新生社印刷

〒 893-0013 鹿児島県鹿屋市札元 1-22-34

